

# ああ わが母校 同志社

村山盛敦

(日本基督教団豊中教会牧師)

はじめに

一九四五年八月十五日の敗戦を、私は江田島で迎えた。両親のいる尾道には戻ったが、全くの虚脱状態であった。とにかくもう一度一からやり直そうと思ひ、同志社大学予科に入学した。どうして同志社を選んだのか、今でもわからない。京都とか、同志社とか、全く縁のなかつたところにやつて来たのは、今でも思うと不思議である。

予科受験の時は、京都駅近くのおのぼりさんが宿泊する加賀詰め所にとまつた。金沢出身の母が、そこが安いと教えてくれたからである。その頃の旅館に泊るにしても、米持参でなければならなかつた。私は更に儉約するためにずたぶくろに飯盒と電熱器を入れて持参した。当時電気使用も厳しく統制されていた。旅館の目をひそかに盗んで、夜中にめしを炊き、出かけ

る時は押し入れのふとんの間に隠した。

うまく行くはずだつたのだが、食事をしない私を不信に思つてか、不在中押し入れを調べられて、見つけられてしまつた。

おかみさんから大目玉を食ひ、あげくのはて数倍の料金を請求された。

予定していた帰りの汽車賃がなくなつたので、進駐軍払い下げのジャンパーを、京都駅裏の闇市で売りとばし、何とかその場をしのいだ。身に付けているものは何でも、たとえ片方の靴だけでも買つてくれる便利な時代だつた。

一九四六年の五月中旬、大学予科に入学した。——大学の事情で入学式が遅れた——京都に出て来たのはよいが誰一人知人がいない。泊るところがないわけである。関学出身で牧師であつた父は、苦しませに、洛東教会の中村金次牧師を尋ねてごらんと言つて紹介状を書いてくれた。

私はそれだけを持って、平安神宮前の中村牧師を訪ね、強引

に牧師館に入り込んだ。

あの食糧難時代である。先生は全く困惑されたことと思うが、宿なしの若者を追い返すわけにも行かずしぶしぶ受入れて下さった。

真夏、汗まみれになつて風呂屋にも行けず、牧師館前の疎水で毎日水浴びした時のことが、今はなつかしい。

いつまでもこんなことを続けるわけにもいかず、神学部に此春寮のあることを知つて、これも強引にこらがり込んだ。

入寮の日、所帯道具一式をかかえて、門衛前で一休みして此春寮はどこだろうと佇んでいた。

詰めえりを着たオッサンのような学生が近寄つて来て、「どこへ行くの」ときいた。

「此春寮に行きたいんですが」

「そこならばよく知っているから、送つて行つてあげよう」と云つて、大きな荷物を抱えて案内してくれた。

これが昨年在日大韓基督教会西成教会を隠退された、先輩の金元治牧師であつた。

こうして同志社予科、神学部、大学院と七年間、同志社で過ごすことになったのだが、はじめに書いたように、どうして同志社を選んだのかはわからない。しかし、まさに「見えざる御手」が私を導いたし、又、今も導いていると断言せざるを得ない思ひである。

### 小田實助教との出会い

一九四八年、私たちは予科から新制大学神学部に進んだ。

その頃、新約神学の担当は小田實助教であつた。先生は大学学生部の仕事もされていたようで、激職でしかも常時コルセットを着けておられる病気の身であつたが、その講義はよく準備され、わかり易く熱意をもつてされた。

ブルトマンのフォルムゲシヒテ「様式的的研究」の紹介が主であつたが、静かに語られるその講義は、私たちを魅了し、毎回毎回の講義がほんとに待ち遠しいほどであつた。

あるクラスの終りに私は先生に質問した。

「先生、フォルムゲシヒテの講義が面白くて仕方がありません。しかし学べば学ぶほど、日曜学校での児童説教が出来なくなつて来たんですが。」

先生は一瞬間をくもらせ、「よりよい説教が出来るようにと学んでいるのだけれども……………あとで研究室にいらっしゃい。」と云われた。

私は窓から夕ぐれが迫つて来る神学館(今のクラーク記念館)の研究室に先生を訪ねた。

先生は一所懸命静かな声で、私に向つて話して下さいました。その内容がどんなものであつたか、私は覚えていない。

しかし、薄暗さが増したその研究室で「どうか村山君がよき説教が出来るように導いて下さい」と心を込めて祈つて下さつ

たその心の暖かさは、今も私の中に生きている。

### 同志社刷新運動

同志社百年史の中に記録されているこの運動の責任者なのでどうしても触れないわけにはいかない。

この百年史のこの記録は、友人北垣宗治君が執筆されたものであるが、私は不満を抱いている。

事実の記述だけであるならばよいが、個人的主観的評価を加えているからである。

最後の締めくくりがこうなっている。

後日談になるが、はたしてこの運動の結果同志社を去った千田には不正があったのだろうか。厳密な会計監査の結果、安藤に対する監督不行届を別にする、千田個人には何の不正も見出されなかったことが理事會に報告された。その時一人の理事が刷新運動の学生たちにぜひこのことを伝えるべきだと主張したが、大塚学長はどういうわけかその発言を無視してしまったといわれる。

私は大学正門の良心碑

「良心之全身に充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」

を繰返し繰返し反すうしながら同志社生活を送った。

良心は目に見えない。目に見える現象だけを問題にするので

はなく、目に見える現象の奥にある目に見えない動機とか、心を問題にするのである。

あの同志社刷新運動は、誰かが意図的に起したのではなく、起るべくして起ったのだ。

この点では、大塚節治先生の「回顧七十七年」の詳細な記録がはるかに良心的記述で残されている。

千田事務局長がいかに学生たちに侮蔑的発言をしていたかもこれを読めばわかる。

### 大塚節治先生の記録

大塚節治先生の「回顧七十七年」は実に詳細に先生の心の動きも日記的に描かれている。

同志社刷新運動については特に、昭和二十五年五月十三日、理事、学校長、学生代表三者の会談を当時の秘書田中良一氏によって残されたものが記されているので、その一部を転載する。

#### (大下神学部長)

神学部としては、今次の公金費消事件のみを肅正せよと叫ぶのではない。斯様の事件の起こり得る根本的事情を改めねばならぬと考えている。それには学園機構の改正を始め重要事項が多々あるが、理事會においてそれらの課題を責任を以て解決に当らねたい。

#### (大下宗教部長)

神学部長としては先程教授会の意向を伝えたが、宗教部長としても一言述べたい。

自分は就任以来学内に宗教意識を昂揚させることに努めて来た。昨今は禮拜堂でも栄光館でも満員である。

こんなことは米国でも例がない。自分はD S C F(同志社学生基督者連盟)の運動に感謝している。

斯く学生の宗教運動が燃え上ろうとしている時にそれを打ち壊すようなことをされては困るのである。初めは大学に我々をくじく或る力があつたが、これを克服してうまく行つた。ところが今回本部に不詳事件が起つたことは我々の運動を邪魔するものである故に理事会はかかることのないように徹底的に肅正してほしい。

(村山D S C F代表)

新島精神の衰退をなげき昨年末から今年へかけキャンペーンを通じ、早天祈禱会を通じ、座談会を通じて精神運動復興の急務を語り合い計画して来た。

今回安藤氏の公金費消事件が四月七、八日頃に本部において発覚しているのに、何故今日迄放置してあつたか、我々同志社改革対策委員間ではこれは安藤氏個人の問題でなく、本部における同志社精神の欠如からきたものであると判断している。

過般のオリエンテーション・ウィークにおいて若王子山墓参が行われたが、参加した学生は極く小教であり教員側は学生部職員二名、教授二名、牧師一名に過ぎぬ、こんなこ

とでよいのか。(中略)

故に今後斯ることのないよう、

経営主義より教育主義へ

レジストラールの官僚制打破

学生より建物使用料徴収の再考

教室配当に際しもっと良心的になれ

等々を叫びたい。我々は学生としての限界を越えないように心掛けているが、学校当局は我々の批判をよく聴いてほしい。

大塚節治先生は五月二十九日に湯浅総長の辞表が出されたことに関連して、その日の日記に心情を吐露している。

この運動は一部の教授の煽動や一部学生の思い上りだけによるものではなく、学生大会の要求が示すような、学校側にいろいろな無理のあつたことが大きな背景になつていたので、あなたが学長、総長代行の無能によるものではない。

### 新島の教育理念と遺言

一八八五年(明治十八)新島が欧米旅行から帰洛し、十二月十日八日禮拜堂の定礎式での説教と同日の創立十周年記念での演説を見てみよう。

此礼拝堂定礎式ヲ施行スル祈禱ヲ神ニ捧クル前に当り、此堂設立ノ事ニ付キ聊カ我意ヲ陳ントス、抑モ教育ハ宗教ト密接ノ関係アル者ニシテ教育ノ基本ハ宗教ニアリト謂フ可シ、故ニ欧米文明諸国何レノ著名ナル学校ニモ礼拝堂ノ設ナキハアラス、且最モ美麗ヲ尽シ十分善良ニ作りアルヲ見ル也、其ハ何トナレバ教育ト宗教ノ関係実ニ一ナル所ヨリ然ラシム、而シテ我同志社教育ハ実ニ基督教ト密接ノ関係アル者ニシテ、今日此定礎式ヲ行ヒ之ヲ神ニ捧献スルハ后来我大ニ喜フ可キ事ナリト思フ、何トナレバ此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者ナレバナリ

定礎式の当日創立十周年記念式典も行われ新島外遊中に放逐された七人の学生たちを思うて、式典で演説している。

諸君ト共ニ今往事ヲ追想シテ紀念シタキハ、昨年我不在中同志社ヲ放逐セラレタリシ人々ノ事ナリ、真ニ彼等ノ為メニ涙ヲ流サザルヲ得ズ、彼等ハ或ハ真道ヲ聞キ真ノ学問ヲナセシ人々ナレトモ、遂に放逐セララルノ事ヲナシタリ、諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ、往事ハ已ニ去レリ之ヲ如何トモスル事能ハズ、以后ハ我儕実ニ謹ム可シ

新島の教育理念を考える時、臨終二日まえに残された遺言十カ条のうち、五カ条を銘記しなければならない。

○同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者相伴ひ相待て行ふ可き事

○同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事するニ係らず皆精神活力あり 真誠の自由ヲ愛し、以て邦家ニ尽す可き人物ヲ養成するを務む可き事

○社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事

○同志社ニ於てハ個體不羈なる書生を圧束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導す可きし以て天下の人物ヲ養成す可き事

○同志社は隆なるニ従ひ機械的ニ流るゝの恐れあり切に之を戒慎す可き事

### 学校教育の今日的課題

学校教育の問題を考える時は次の新聞記事はよく問題点をとらえている。

一月九日の朝日新聞トツプに

「学校五日制」私学は乗らず

高校で3割、中学2割

大都市圏ほど低く

すべての国公立学校で昨年九月スタートした「学校五日制」について、制度に同調して月一回以上の土曜休日を実施している私立学校が、高校で三割、中学では二割りにとどまっていることが八日、文部省の調査で明らかになった。首都圏や関西な

ど大都市での実施率の低さが目立つ。大都市圏には中学一貫教育を掲げた進学校が集中していることから、文部省は受験競争が「五日制」の低い実施率に影響しているとみている。同省は、八日付で私学への強い指導を求める通知を都道府県に送った。五日制には賛成だが、文部省が本気で権力を用いて一つの立場を押しつけようとしているやり方には反対だ。

同じ朝日の一月十二日社会面に

進学率上げる 県がハッパ 鳥取  
公費で予備校視察

全普通高で「勉強合宿」

大学や短大への進学率を押し上げようと、県ぐるみで公費を使って「学力向上運動」に取り組んでいる鳥取県の実情が十一日、秋田市を中心に開かれていた日教組の教育研究会・分科会で報告された。全国平均より低い進学率が県議会で取り上げられたのをきっかけに全普通高で一斉に「勉強合宿」や、他府県の名高い公立進学校や大手予備校を始めるなど、三千五百万円の予算をかけたプロジェクトが展開されている。

解説の終りを「鳥取県によると、学力向上運動のため、すでに昨春段階で京都、広島など二十五府県が同様の予算助成をしている、という。」と結んでいる。

私は現在、日本基督教団豊中教会の牧師であるが、同時に学校法人豊中キリスト教会学園豊中愛光幼稚園の理事長、園長でもある。

親たち全体が、進学率の向上に血走って、幼稚園もまた、直

接その影響を受けている。また、文部省がぐいぐいとぶきみな力で、一つの立場を押しつけてきているように思う。

私学教育は色々な面から、今教育の危機に立たされていると云わねばならない。

しかし、この時にこそ、新島の教育理念に立ち返り、あの遺言の、「同志社」を「キリスト教主義学校」と読みかえることによつて進むべき道を、見定めたいと思っている。

もう一度、聖書を読み直し、今、語っている「イエスのことば」のもとにある「イエスの心」を探り当てる作業を、幼児たちと共にしていきたいと思っている。



# 新島襄の教育理念

## 新島学園の場合

緒方純雄

(新島学園女子短期大学学長)

私に依頼された原稿は、新島襄生誕一五〇年を迎え、創立一七周年になる同志社の現状と将来像を新島先生の理想、教育理念に照らし合わせながら執筆することであった。しかし、私は依頼されることについて直接に応えるというより、側面から或いは間接に伝えて書くことにしたい。理由は、同志社の現状とか将来像を本当に書くことができるのは、また書いて貰いたいのは、今同志社にいる人たちだと考えるからである。現状と問題を深く身にしみて感じとっている人にして書くことができらるだろう。この点では人後に落ちていないとは思いはするが、やはり私は資格については多少欠けている。さらに、新島先生の郷里で、先生の教育理念を受け継いできている新島学園の歴史と現状、問題を書くことが、側面からではあるが、依頼されていることに光を当てるのではないかと考えるからである。

私は一九九〇年に四十一年勤めた同志社を退職し、新島学園女子短期大学学長に就任、この四月で三年目を迎える。新島学

園は一九四七年に創立され、四十六周年を迎える。そして女子短期大学は今年十周年を記念する。初代理事長は湯浅八郎先生であり、初代学長は岩井文男先生であり、湯浅先生は同志社総長であったが、初代中学校長兼理事長であった。あの敗戦直後の状況の中で、新島先生の教育理念がどのようにして此の学園を興し、今日に至ったか。これについて記すことが、側面からではあるが、また間接的ではあるが、反って直接的に依頼に込めることになろう。

### 一、新島学園のはじまり

「新島中学を安中に」という声はすでに昭和初期にあった。湯浅正次現理事長が中学生の時、安中教会青年会誌に「新島中学設立論」を投稿している。昭和三年秋、その当時各地の教会が持ち回りで開いていた両毛基督教青年大会が安中教会で開催

された。その時の模様を田中省三氏は次のように記している。

その年は安中の年番で各地から馳せ参じた青年たちが、新島記念会堂に満ちていた。午前の第一部が終り、午後の第二部に移ろうとしていた時、手擦れた黒靴を抱えて飛び込んできたのが、当時渋川教会の牧師をしていた栗原陽太郎先生であった。先生は「甚だ申し訳ないが、私に是非二、三十分の時間を割愛してほしい」と言つて、司会者から許しを得ると、靴の中から原稿を取り出して、青年諸君に呼びかけたのが、思いがけぬ新島中学を安中にたてよ、という一くさりであった。此の話に感激して献金を募つたら十二円集まつたので、その管理を依頼された安中教会の青年会は、早速銀行に預けて今なお新島中学設立基金と銘打つて、此の記念すべき貯金通帳を大切に保管している。当時私は年少にして、此の会に出るのを遠慮したが、後日その模様を聴いて、感激のまま草して、翌年二月の金蘭誌青年会誌に投稿した。

年少で出席しなかつた者をも感激させ、記して投稿せざるを得なくした熱情は、教会青年にとどまらず多くの人をとらえたにちがいない。戦前、上州の教会青年たちが、建設基金として数百円を集めていたことも、こうした事情の一端を語っている。

安中教会牧師であり、創立当初の新島学園中学校長事務取扱であつた江川栄先生は、「新島学園のはじまり」の中で次のよう

に記している。

昭和二十年八月、安中有田屋の先代湯浅三郎翁は終戦の勅語を聞いて安心し、翌月永眠されたが、この家の財産は公共の為に使え」というのが翁の持論であつた。それから間もなく、当主湯浅正次氏が牧師館に來られた。亡父の志実現のため、新島襄を記念する学校を興しましよう。一家もこれに賛成です」とのこと。

それから準備は着々と進められ、名称も「新島学園中学」と決まつた。しかし、問題が残る。

此の学校をただキリスト教主義というだけでは、生きてこない。はつきり目鼻をつけねばならぬ。しかも、末永く栄えさせるためには、誰の心にもひびく理念がほしい。そこで私が草案を作り、湯浅、柏木、山崎三氏が目を通し、多少手直しして定めたのが「五原則」である。キリスト教の背骨に新島先生の心、敗戦日本の復興、世界市民の自覚を肉付けしたものである。これを作つたことはよかつたと思つている。私が草案を作つたと言つたが、個人の机の上の作文でなく、実に天からの声であつたのである。

ここには、新島先生に導かれ、先生亡き後、群馬県県会議長、国会議員であつたが、居を安中より京都へ移して、同志社理事

として長くその財政に尽した湯浅治郎氏から三郎、正次氏へと新島先生への傾倒のうちに伝わった宿願がすであつた。「新島中学を安中に」と高まる声と合して、その熱情はキリスト教を背骨として、新島先生の心、日本の復興、世界市民の自覚を具体化した五原則を表明する学園創立へと至らせている。繰り返して言及される敗戦日本の現実の中で、教育理念はすぐれた理念であり、またいつも現実に対して実践的呼びかけであり、実践に移すことを求めてやまないものであつた。

「財団法人新島学園設立理由書」のなかで、湯浅正次氏は次のように記している。

抑々群馬県碓氷群安中ノ地ハ故新島襄先生ノ郷里ナリ。先生ハ明治維新前國禁ヲ冒シテ海外ニ雄飛シ、在外十年、ソノ間偶々欧米ヲ歴遊セル岩倉大使一行ヲ東道シ、且ニ欧米各國ノ教育制度ヲ視察調査シ、以テ我が國民教育制度ノ確立ニ多大ノ貢獻ヲ致サレタリ。然モ一度帰朝セラルルヤ、先輩知友ノ切ナル懇請アルニ係ラズ、官途ニ就カズ、京都ニ私立学校同志社ヲ創立シ、自ら一身ヲ賭シテ体験セラレタル基督教ノ信仰ヲ以テ、救國済民の國士ヲ養成セント企画セラレタリ。先生ノ高邁ナル信念ハソノ永逝後春風幾星霜歲月ト共ニ愈々吾人ノ欽慕惜カザルモノアルナリ。

今ヤ吾國ハ鞏固以來未曾有ノ國難ニ直面シ、之ガ恢復復興ノ為ニハ次代ヲ背負ウベキ青少年ニ天地ノ神ヲ畏レ、社

会ニ対スル責任ヲ重ンジ、独立不羈ノ精神ヲ鼓吹スル基督教ノ信仰ニ基ク行學一体ノ人格教育ヲ施スヨリ他ニ途ナキハ吾人ノ固ク信ジテ疑ハザル所ナリ。人此ノ信仰アリテ上級学校ヘノ基礎教育ヲ得、或ハ農村ノ指導者トナリ、新文化ヲ建設シ以テ國家ヲ救ヒ、平和世界ノ建設ニ貢獻シ得ベシ。

この理由書でも、また一九四七年五月五日の新島学園中学第一回入学式辞での江川栄校長事務取扱(校長は湯浅八郎)の「新島学園の理念構想」でも、また一九八三年五月十日の新島学園女子短期大学開学式での湯浅正次理事長の「挨拶及び経過報告」を読んでも、日本の敗戦の現実のなかで、あるいは「鞏固以來未曾有の問題」に直面し、また「敗戦直後のことで日本国民はどこでも、物質的欠乏に悩まれ、精神的にも肉体的にも、疲弊、虚脱、どん底の状態にあつた」人々、青少年に対して新島先生より受け継いだ教育理念は生きたメッセージであり、活力であつた。人もこれを活力として受けとつたのである。これを確信して学園は創立され、始まつたのである。

一九四七年五月五日、新島学園中学第一回入学式が安中基督教會会堂において挙行された。入学生徒数、一年四十五名、二年三十七名計八十二名、教職員十名であつた。江川校長事務取扱は式辞で、理事、監事、職員、生徒、父兄保護者、安中町長來賓、教會信徒に向つて「学園の理念構想」を宣言している。

敗戦日本再建の道に多くありといえども人材の養成に及ぶものはありません。わけても仰いで神を畏れ、伏して己れを慎み、進んで人を愛し、国家公共に貢献すべき人物を興すの一事に至っては緊要事の中の緊要事と云わねばなりません。ここに当安中町有田屋の当主湯浅正次氏は御尊父三郎翁記念の為、近親一族の賛同を得、知人朋友と相計り、不尠の資産を割き、異常の決意の下に左の方々を役員とする一つの財団法人を設定し、之を新島学園と名付け、去る三月十三日を以て文部大臣の認可を得ました。

と先ず述べる。先きの目的をもつて、新島学園は「異常な決意」をもつて創立されたのである。続いて以下のように述べられている。

我が新島襄先生は幼にして節山公(旧藩主板倉節山公)の寵を蒙り、長じて青雲の志止み難く、国禁を冒して遠く海外に脱奔、つぶさに艱難を嘗めつつ世界文化の泉を探ること十年に及びました。次いで今を去る七十三年前明治七年晚秋十一月、胸中深く基督教化に依る新日本建設の壯図を懐いて父母の在す此の安中に帰り着かれ、何よりも先ず基督教を説いて此の安中教会の基を置かれ、滞在いくばくもなく、去つて京都に同志社を創められました。基督教を聴かれた最初の一人故湯浅治郎翁は、後群馬県の麁娼を断行し、第一回衆議院議員となり、先生亡き後は同志社会計として

無料奉仕せらるること二十年、晩年はこの高雅壯麗なる安中教会堂の建設に心血を注がれました。令息三郎氏多年安中町長並びに県会議員として地方自治に貢献せられ、今また令孫正次氏が新島学園の創立経営に熱誠を傾けらるる次第であります。節山公の感化は新島先生を励まし、先生の播かれた靈の種は芽生えて安中教会となり、育つて上州各地の教会となり、さきに共愛女学校を興し、今やここに新島学園を設立すること相成りました。

さて新島学園が今ここに高く揚げんとする基督教的人格主義教育とはいかなるものでありましょうか。先ず第一に基督教的精神を徳育の模範といたします。第二に生徒を愛し、その人格を重んじます。第三に智識水準を高くし、学問研究の喜びを教えます。第四に勤労を尊び、天与資源の利用を学びます。第五に己れを知り、国を愛し隣人に仕え、世界を友とする心を養います。以上は本学園教育上の五大原則であります。すべて理想を追うものは苦しみを嘗めねばなりません。右の理想を追う新島学園また然りでありませぬ。然して日本再建に資すべき人物の養成の道はこの外には断じてありません。

創立へと導いた先人たちの熱情、新島先生の教育理念に賭けた決意、そして敗戦の齊らした現実の中で理念を五原則として実践へと定めた意志に今私たちは敬服せざるを得ない。教育は傾倒、熱情、決意ある人なくして実ることはないだろう。

## 二、新島学園女子短期大学のはじまり

新島学園女子短期大学は、一九七七年の新島学園創立三十周年記念会で、設立の希望が相次いで表明され、それが具体化し一九八一年七月文部省に大学設置許可申請書が出され、八三年一月十七日に認可された。初代学長は岩井文男先生、病気の岩井先生を助けた学長事務取扱は後に二代学長となった高道基先生であった。

一九八三年五月十日、二二八名の第一期学長を迎えて開学式が挙行された。「挨拶及び経過報告」のなかで湯浅正次理事長は、三十六年前の安中教会堂において、行なわれた学園の設立式を回顧し、「新島先生の教育理念が新しい響きをもって私たちに語りかけている」という感激をもって述べている。

新島先生と申しますと、若くして大きな理想を抱き、国禁を犯してまで、アメリカ合衆国に渡り、そこでキリスト教と出会い、またアメリカ東部のアーモスト大学に学び、数々の新しい文化、知識を体得してまいりました。帰国してからは、同志社大学の前身であります同志社英学校を京都に設立して、キリスト教精神に基づく人格教育を行ない、男女平等人格尊重を實踐し、民主主義教育を開拓いたしました。もちろん初期のことでありましたから、若鬮の連続ではありません。同志社大学の旨意において、ひとり技芸才能

のある人物を教養するにとどまらず、いわゆる良心を手腕に運用する人物を出さんことを努むと、宣誓されたのは今から百年も昔のことでありますが、今日でも新しい響きをもって、私達に語りかけているようであります。新島学園はこの新島襄先生の実践的理念、教育理念を受け継ぎ、地元有志の方々の手によって、新島襄先生ゆかりの地であります当時の安中町に設立されたのであります。爾来、今日に至るまで三十六年間……教育の五原則を掲げ、キリスト教精神に基づき、自由で敬虔な人格、国際的教養、民主的社會人としての良識をもち、神と人々に奉仕する人材の育成を目的として、中学校、高等学校の教育に全力を注いでまいりました。

新島先生の教育理念、また開学二年前に逝去した創立以来の学園理事長湯浅八郎先生の「日本も世界に視野をひろげるべきであるという信念」を受け継いで「国際社会に目を向けた教育を行ない、職業人としても、主婦としても国際性があり、キリスト教的人格教育を身につけた女性を養成」するため女子短期大学を設立したと述べられている。

## 三、まとめ

新島学園はこのようにして始まり、このようにして今日に至っている。これは新島先生の教育理念に感動し、またその活力

を敗戦直後の日本の現実において体験した人々が学園を創立し、決意をもって支えてきたものである。およそいかなる事業であれ、その創業に当っては並々ならぬ事業への熱情と決断を欠くことはできない。況や、理念を高く掲げて学校を創立するなど、その理念へのやみがたい熱情と決断がなければ、到底不可能なことである。私が引用してきた人々の言葉に、私は新島学園の創立にあつた人々の理念への熱情、感激と決断に触れる。そして心燃える思いがする。そして単にキリスト教主義とかキリスト教精神と云わないで、これを五原則として肉付けしていることに、現実へ向かつて力強くチャレンジしていること、またチャレンジできる力を確信していたことは、私を感動させる。創立にあつて生気澁刺としていた理念への感動はいずれ年月の経過のなかで消失するとか、薄れる。そして建て前だけが伝承されるのが常である。しかし、四十六年という短かい歴史の新島学園においては、この理念は受け継がれてきている。感動をもって。創立の理念が受け継がれるということは、理念がただ存続するというのではなくて、人があつて、それに感動し、あるいは感激し、それをもって伝え、受け継がれることでなければならぬ。感動し、感激するということは、新島先生の思想とか教育理念が今私たちが生きている現実の中で活力を持っているとか、アピールするとかがなければ、できないことであろう。新島先生の場合には幕府は倒れ、旧体制が崩壊し、新しい日本を方向づける中で、先生のすぐれて精神である人間主体、人格主体形成をめざす教育理念はチャレンジであり、また活力

であつた。学園創立にあつた人たちは、日本の敗戦の現状の中で、先生の理念はチャレンジであり、活力であると確信し、確証せんとした。そして私たちが今、身をおく現実において先生の教育理念がそれこそ活力であり、方向を示し、それが真理であると確信し、確証し実践化することがなければならぬ。建て前ではない。現実で確証することである。このことができていなければ、伝え、また受け継ぐことはあり得ない。「設立理由書」に次いで「事業計画書」が示されている。その冒頭で

教育ハ人物ニシテ計画ニ非ズ、況ヤ金錢ニ於テオヤ。古來人材ヲ教育シテ天下國家ニ貢獻シタル学校、學塾ハ必ず先ズソノ中心トナル可キ卓抜ノ士アリテ、俊秀ナル青少年ノ笈ヲ負イテ其下ニ集ヒ、互ニ切磋琢磨シテ、其二達シタル結果トイワザル可ラズ

とある。理念もそれに感激した人あつて、初めてこれを伝えることができよう。キリスト教主義教育もこのようなパトスを欠いてできるはずがない。

私は一九四二年に同志社大学文学部神学科に編入学し、四五年九月に卒業した。一九四九年から四十一年間神学部教師であつた。学生時代、それに続く暫らくの間はまだ新島先生に直接出会つた人、また次代の人たちがいて、この人々から新島先生のこと、初期の同志社のことなどを聞くことができた。そのうちの一人、長坂鑿次郎先生は私の信仰の師である。洗礼も

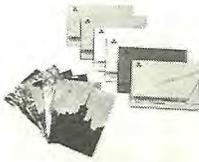
受けた先生である。十七歳の時、同じ高崎出身の深井英五氏に伴われて新島先生宅を訪問したことなど、後で読んだこともある。こうした人の言葉にはおのずと感動がこもっていて、私も感動して聞いたことがある。同志社に今このような出会いがあるだろうか。

新島学園女子短期大学は新島学園より創出されている。歴史が浅いため、新島先生の教育理念を感動をもって受け継ぎ、私たちのいる現実の中でその活力を確証し、決意をもって伝え、将来の展望を拓いて行きたいと願っている。設置基準の改正に伴ってカリキュラム編成を急いでいる。教育理念を新たに確信し、この基督教主義教育理念をカリキュラムの核に位置づけ、これによってカリキュラムを整えることにしている。同志社が私たちに他山の石となるか、新島学園が小たりとも同志社に他山の石となるか。いずれにしても、これ程新島先生の教育理念を等しく掲げて歩む学校はないはずである。互いに健闘しあいたいものである。

## 同志社の絵葉書シリーズ発行

茜色の雲に映えるクラーク記念館、淡雪の積もる良心碑、桜花欄満の啓明館(旧図書館)、大文字の送り火を背にする栄光館など、多くの校友・同窓が在学中馴染れ親しんだ「今出川キャンパス」の四季折々の風物および「田辺キャンパス」の雄大な建物群を紺碧の空をバックに捕えたものおよび新島先生の肖像画遺墨などを、それぞれ六枚一組にして発行しております。

- 重要建築物シリーズ
  - 新島襄の面影シリーズ
  - 大学今出川校地シリーズ
  - 大学田辺校地シリーズ
  - 女子大学今出川校地シリーズ
  - 女子大学田辺校地シリーズ
- 定価各シリーズ六枚一組二百五十円



- 購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。
- 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

発行 同志社収益事業課  
京都市上京区今出川通烏丸東入  
電話(〇七五)一二五一―三〇三七〇ハ

# 夢を見続ける

野 本 真 也

(大学神学部長・教授)

デイヴィスによれば、一八九〇年一月五日、新島襄は大磯で最後の英文の手紙を書いている。誰に宛てて書いたのか、今では不明であるが、この手紙は「十五年前に私はキリスト教主義の大学を建てようという白日夢 (a day-dream) を心に抱きました」(J・D・デイヴィス著／北垣宗治訳『新島襄の生涯』 同志社校友会 一九七五年、四十五頁) という言葉で始まっている。

たしかに、新島にとってキリスト教主義大学を設立することは「夢」以外のなものでもなかった。それは、この「夢」の実現についての希望と確信を述べることで、この手紙が締めくくられていることから明らかであろう。新島永眠の翌年(一八九一年)一月に出版されたデイヴィスの新島伝の中では、この箇所は次のように翻訳されている。「余は實に我漠然夢 (my vague day-dream) の如き基督教主義大学の設立も、早晚實行を見て、常に我等を導き思はざる仁恵を加へ玉ふたる神に多謝

するの日に至らんことを確望するなり」(デビス著『新島襄先生之傳』(村田勤訳、大阪福音社・警醒社、一九六頁)。

このように新島はキリスト教主義大学として同志社を設立する夢を見た。しかしそれだけではない。まさに生涯を通じて大小さまざま夢を抱き、見続けたのではないだろうか。そしてその究極の夢が同志社大学の設立にほかならなかったのである。というのは、新島襄全集を読んでみると、「夢」という単語がかなり目につくからである。たとえば、説教では旧約聖書に出てくる「ヤコブの夢」や「ダニエルの夢」が題材として取り上げられたことが、残された草稿から伺える。また漢詩の中にもいくつか夢という言葉が出てくるものがある。

男兒決志馳千里 自嘗苦辛豈慰家  
却笑春風吹雨夜 枕頭尚夢故園花

(男児志を決して千里に馳す、自ら苦辛を嘗む豈家を思わんや。却つて笑う春風雨を吹くの夜、枕頭尚お夢む故園の花。)

生別切於死別情

河梁焉得意揚々

春風秋雨天涯客

夜々夢回鴨水傍

(生別は死別の情よりも切なり、河梁焉くんぞ得ん意揚々たるを。春風秋雨天涯の客、夜々夢は回る鴨水の傍。)

十年空蓄西遊志

今日遂成天外身

巴里芳花倫動月

夢尋相国寺前人

(十年空しく蓄う西遊の志、今日遂に天外の身と成る。巴里の芳花倫動の月、夢は尋ぬ相国寺前人。)

〔新島襄の漢詩〕 小川与四郎著

同志社新島研究会 一九七九年参照)

歴史に「もし」ということは持ち出すべきでないと言われているけれども、もし新島が夢を見なかったなら、夢を見続けているなかったとしたら、どうであろうか。その後の同志社も現在の同志社も存在することはあり得なかったし、日本の近代化の歴史もはたしてどのようになっていたことであろうか。

新島がこのように「夢見る人」であったことは、「襄」という名前の由来と決して無関係ではないであろう。「襄」が旧約聖書の創世記に出てくる「夢見る人」ヨセフ(英語ではジョセフ)

ジョー)にちなんで付けられたということを知ったのは、高校生の時、父の書棚に並んでいた何冊かの新島伝を読んだことであるが、ワイルド・ローヴァー号のテイラー船長が当時の新島の固い志を知り、厳しい将来を予測して、創世記のヨセフのように、新島の夢が幾多の困難と苦難を越えて実現されることを願つて、このように命名したのであること、またテイラー船長から新島を託された船主ハーディーも、ジョーと名付けられた新島の密航理由書を読み、ただちにヨセフの生涯と重ね合わせて新島の将来のことを想い、生涯にわたる支援を決意したのであることは想像するに難くない。

新島は、彼の心臓が肥大しており死の危険が迫っていると医師によつて診断されていることを八重子夫人から告白され、一八八八年七月四日、そのことをハーディー夫人に知らせる手紙を書いているが、その中で、自分はキリスト教主義大学を建設するという「絶望的な意志と計画」(a desperate will and plan)を抱いていると述べている。当時の新島の状況を想い浮かべてみると、たしかに彼の心境は絶望的であつたと思われる。しかし新島はヨセフのように困難な現実と死の危険に直面しながらも、彼の夢を見続けたのであつた。

旧約聖書のヨセフの姿は新約聖書のイエス・キリストの出現を予言し、その姿をあらかじめ描き出していると、伝統的な聖書神学では解釈されてきたが、それはヨセフとイエスの姿を二重写しに重ね合わせてみると、表面的にはまるで違うけれども、そびたりと一致する要素がいくつも見いだされるからである。そ

してその一つが、夢を見るということにほかならない。ヨセフが将来を予知する不思議な夢を見たように、イエスはまさに「神の国」（神の愛の支配）という夢を見たのである。だからこそ、イエスもまたヨセフのように多くの苦難を味わったのであったが、それにもかかわらず神の国の夢を最後の最後まで見続けたのであった。そして、だからこそ、その神の国が、夢から新しい現実になっていくということが起り得たのである。

神学部で学び、神学部で教えていると、学生時代に夢を抱き、その夢を見続けることによって、不可能とも思える困難を乗り越え、その夢を遂に実現していく先輩や後輩、卒業生の姿を何人も思い浮かべることができる。人間というものは、夢を見続けることを断念した途端、人生の歩みはその段階でとどまってしまうかのようなのである。だとすれば、なによりもまず夢を見続けることを大切にする教職員の姿勢とキャンパスの雰囲気こそが、同志社の教育に基本的に重要なのではないかと思われる。

たとえその夢が周囲には突飛に思われるものであっても、また本人にとつてもただ単なる夢でしかないものであっても、夢というものにはしばしば未来において初めて開示されるような深い意味が隠されている場合がある。もしその夢が単に自分の欲望の投影に終わるものでないなら、たとえ現実の中で否定的な反応を引き起こすとしても、それを超えて、その夢がより大きな次元で新しい現実となつて、より大きな結果をもたらすのであり、聖書はそのことをヨセフやイエスの生涯をとおして語るうとして語るのである。

ヨセフは十七歳のとき不思議な夢を見た。新島も十七歳のとき江戸湾に並ぶオランダ軍艦を見て海外文明の進歩に驚き、航海術を学ぶ決心をした。ひるがえつて今、同志社大学に入学してくる同じ年頃の学生たちは、いったいどのような夢を見ているのだろうか。もし今、新島が同志社の学生であったならば、はたしてどんな夢を見ることだろうか。

われわれは今、国際化、情報化、学際化によって激変しつつある時代に直面して、現状のハードもソフトも刷新して、新しい同志社へと脱皮していくべき重要な課題を前にしているが、もし今、新島が同志社の一人の教師だったら、どんな夢を見て、どんなことを語り、どんなことをしようとするだろうか。そんなことを想像しながら、今わたしもわたしなりに、あらぬ夢を見、その夢を見続け、イエス・キリストに託された夢、そして新島が見続けた夢、また学生たちが見続ける夢を大切にしていきたいと思つている。

# 自由教育・自治教会

今 関 恒 夫

(大学文学部教授・学生部長)

新島の、あるいは初期同志社の教育理念に、大筋において曖昧な点はない。一言をもってすれば、「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」がそれである。

「自由教育」とは liberal education、平板に言えば、知育・徳育・体育の調和をめざす全人的教育である。しかし、新島が真にめざしていたのは、事実上、たんに liberal arts college ではなく、「我日本国の為、に其生命を擲つて働く所の政治家、実業家、文学者、宗教家等を養成し、以て我日本独立を益々堅固ならしめ、我日本の同胞をして益々安寧幸福を得しめんが為」(傍点引用者、以下同じ)の専門教育をほむ「す university」の設立であった。その目的達成のために新島は、もろもろの「科学文化の智識」を「運用するの品行と精神」養成の必要性を説いてやまなかつたのである。

その「品行と精神」の養成を可能にする基盤は、キリスト教、就中「自治教会」的なキリスト教(Congregationalism)でなければ

ばならなかつた。新島がことさらそれを強調するのは、かれのアメリカ会衆派教会との深い関係と、上からの組織による統制ではなく、個々の教会の独立と教会員による自治を尊重するかれの信仰的態度による。その点は、「日本基督一致教会」と「日本組合教会」との合同反対の意思表明にみられるように、強硬でさえあつた。こうした態度は、教育理念にうつしかえてみると、つぎのような特徴として顕れてくるだろう。第一に、「キリスト者の自由」(皮肉にもそれは、文部大輔田中不二麿が、新島を論難する意味でいったという「君は、イエス・キリストの奴隷だ」という台詞とかさなる)にもとづいて行動する「自治自立」の人格の養成であり、第二に、新島という真に青年を愛することのできた偉大な教育者の、個々の学生に対するなみはずれた細やかな心遣いと寛容な扱いである。

最後に「国家万歳」という、いささかひつかかるところのある言葉について述べておきたい。新島が明治国家独立の基盤と

して、キリスト教的的人格の養成が不可欠であるとの信念を抱いていたことは、すでに述べた。それは、とりもなおさず新島の「国家万歳」には、後の世のそれとは異なる意味合いがこめられていたというのである。

我カ校をして深山大沢之如くになし、小魚も生長せしめ、大魚も自在に發育せしめ、小魚大魚各其分に応じ、其身を世に犠牲となし、此美ハしき日本を早晚改良して主之御国、乃チ黄金時代に至らしめん事ハ小生之日夜熟祈して止まざる所なり(二八八九年十二月三十日 横田安正宛書簡)

もちろん、新島には、われわれとはちがった、明治人としての国家にたいする思いがあつたにちがいない。しかし、基本的には「日本を早晚改良して主之御国」とするということが、かれの「国家万歳」の意味であつた。だからこそ、新島は、一八八二年ごろまで、刑事の尾行がつく要注意人物だったのである。このような新島の教育理念の実現は、そう思い通りに運んだわけではない。思うにまかせぬ、ずいぶんひどい学生もいたし、問題もおこつた。しかし、中野好夫氏は『蘆花徳富健次郎』のなかで、初期の同志社について、こう述べている。

乱雑といい、乱脈とはいうが、ぜひその間に注意したいことは、そうした中で、厳として真の教育精神は脈々として生命に溢れていたということである。なるほど、全体をと

つて数字的に見れば、かなりの悪い歩止りであつたかもしれぬ。だが、その歩止りのかぎりでは、彼等の生み出した明治・大正期各界の俊秀指導者群<sup>\*</sup>という点において、まさに東の慶応義塾と双壁であつた。壮観といつてよい。学制整備されて教育亡ぶというのが、日本今日の現状であろうが、真の教育とは、やはり自由、そして豁達なる精神の横溢するところ、そこにおいてはじめて存在しようという貴重な教訓なのではあるまいか。

これは、新島の、したがつて初期同志社の教育理念が、すくなくともこの時点では達成されていたことを認めた評価である。われわれにとつての問題は、しかし、現在にある。

現在の同志社大学は、すでにれっきとした総合大学である。そしていま、校地の拡張が実現し、工学部の充実・移転、新学部構想、大学院充実構想等によつて、そのかたちをさらに整えようとしている。その意味では、新島自身にはかなえられなかつた願いが、様々な曲折をへながら、今もひろがりつつある。それはそれで、大胆かつ慎重に推進していかなければならない。しかし、それは同志社大学にかざられた問題ではない。

ここで、私が問題にしたいのはむしろ、現在の同志社にあつても、教育と「キリスト教主義」がうまくかみあい、しかも自由闊達なる精神が横溢しているかどうかである。もちろん、当時と現在とでは、教育機関としての規模、制度上の複雑さがちがうし、大学に対する教職員、学生、社会の要請も異なる。し

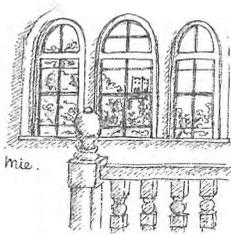
かし、そうしたちがいをこえて、同志社の「キリスト教主義」教育と「自治自立」の精神が生かされていくべきだ、と私は考える。といつても、そのような教育理念が現在、どのように具体的に生かされるのか、はつきりとした考えをもっているわけではない。問題の所在を、私なりに指摘し、この稿を終わることにした。

「キリスト教主義」は、同志社大学の要である。げんに、正課も、課外も、それにふさわしい「キリスト教主義」的な特色をもつ。しかし、それは、「智識を運用するの品行と精神とを養成する」に不可欠な「実に活ける力ある基督教主義」となっているかどうか。たんに知的な意味で、キリスト教文化を教えるのが「キリスト教主義」ではないだろう。同志社人ひとりひとりの生き方と係わるようなかたちで、キリスト教が同志社教育と結びつくことが必要なのだと思う。もちろん、言うは易しである。キリスト教が現代とどう切り結ぶか、が深刻な問題となっている現在、ことがらがそう簡単ではないことは百も承知である。しかし、この問題を避けてとおれば、「キリスト教主義」はかたちだけのものになってしまふにちがいない。

一方、「キリスト教主義」はある意味で「自治自立」の精神と抵触する。「宗教の自由」は誰にでも保障される権利である。「キリスト教主義」を標榜する同志社に身をおいても、どのような思想、信条を抱こうと、それぞれ個人の責任において自由である。その点において、何の差別もあつてはならない。それは、そのとおりである。しかもなお、前に述べたような意味で

「キリスト教主義」を貫いていくためには、「活ける力ある」キリスト教そのものが（それが何であるかが問題なのだ）、いつでも、同志社大学のどこかに、厳然として存在しなければならぬ。「キリスト教主義」を標榜する以上、われわれには、否応なく、そのような問いへの思想的対質が要求されている。先端的な、しかも奥深く、独創的な学問と教育、それを真に生かす「キリスト教主義」、この二筋道が、同志社大学のめざすところであるのなら、その困難な道を歩むほかはないだろう。

\*中野氏が、蘆花が二度目の同志社時代に多くの友人を得たが「むしろ比較的無名の社会人として、ただその職場、職場で篤実にその市民的義務を果たしたにすぎぬ人たちも数多い」と述べている点にも注目しておきたい。



# 同志社のUniversity Citizenship

「同志社大学設立の旨意」の中に、次の記述がみられる。

我邦に於てハ、未曾有の国会を開き、我か人民に於いてハ、未曾有の政權を分配せらる、是れ実に我邦不朽の盛事なり、而して苟も立憲政体を百年に維持せんと欲せば、決して区々たる法律制度の上にも依頼す可き者に非ず、其人民が立憲政体の下に生活し得る資格を養成せざる可らず、而して立憲政体を維持するハ、智識あり、品行あり、自から立ち、自から治むるの人民たらざれば能はず、果たして然らば今日に於て、此の大学を設立するハ、実に国家百年の大計に非ざるなきを得んや

「同志社大学設立の旨意」が書かれた明治二十一年十一月は大日本帝国憲法が發布される三カ月前である。明治維新後、日本国がどういふ社会になっていくか定まっていなない情勢の中で、

有識者が天下国家を論じ、一国の運営をどう計るか模索していた時代である。引用した部分は、天下国家をどう運営していくかという観点から同志社大学設立のねらいを述べたところである。

立憲政にもとづく近代国家を担う「人民」の養成を目的として大学を設立することをのべているが、この「人民」とは、「良心を手腕に運用する」自治自立に富んだ人達である。いいかえれば、「自治自立に富んだ品行ある」「人民」を養成することによって、近代国家の柱石となる人々をつくらうという趣旨である。これは、「人民の手に拠つて設立」される私立大学である同志社大学が社会的貢献としてなすべき方向をここで示したものと解釈される。つまり、政治社会体制の変革期に、教育をとおしてなされるべき社会的貢献のあり方を明示したものと見えよう。この社会的貢献を今日の状況の中におきかえてみるとどうなるであろうか。というのは大学の社会的貢献のあり方から同志

香川孝三

(大学文学部教授)

社の将来をさぐっていきたいと思つてゐるからである。

大学という教育機関がおこなうべき任務は教育・研究とそれを円滑におこなうための経営・管理である。しかし、それだけでなく、もう一つ、社会的貢献をつけ加える必要があるのではなからうか。

現在企業においても社会的貢献の必要性がさげばれている。企業が生産活動やサービス活動によつて利益を大きくするという目標をもつのは当然であるが、それだけでいいのかという反省が生まれてゐる。この反省から企業も個人と同様に社会に貢献することが期待されており、地域社会との宥和をはかる必要性がさげばれている。これはCorporate Citizenship（企業市民性）とよばれている。大学もこれと同様にUniversity Citizen-ship（大学市民性）をもつべきではなからうか。

しかし次のような反論がありえよう。企業は金もうけをして利益をあげることを主たる目的としてゐるからこそ、その社会的貢献が議論されてゐるのであつて、利益をあげることを目的としてゐない大学は、その存在自体が社会的貢献ではないかという批判である。たしかに学生を教育し、社会に送りだしてゐる点だけで社会への貢献といえるかもしれないが、それ以上の社会的貢献が大学に期待されてゐるのではないかと思われ。そこに同志社大学が将来こころみるべき方向の一つがあると思われ。

次に、「同志社大学設立の旨意」の書かれた時代背景と異なるなかで、University Citizenshipを実現するために留意すべき点

を考へてみよう。

### (1) 学校教育終了後の教育機会の提供

人生八十年時代を迎へ、二十二、三歳で学校教育をおへても、あと六〇年もある。その間に社会の変化に対応して新たな知識や技能・技術を習得する必要性が高まつてゐる。一つは女性や中高年者が再就職や社会参加のために再教育をうけたいという要望がある。もう一つは企業側の要望である。これまで企業内ではOJTやジョブローテーション等によつて企業内で人材を育成してきたが、より高度な技術を身につけたり、独創的な研究開発をおこなへる人材を養成するためには、それだけでは不十分であり、仕事を離れた場での再教育が必要になつてゐる。

したがつて、この再教育には、専門的なより高度な知識や技術を教育する場合、それまで身につけた知識や技術以外の新しい知識や、技術を教育する場合、一般的な教養を身につけて豊かな生活をめざすための教育の三通りの場合が考えられる。

これらの教育（リカレント教育とか生涯教育とよばれている）に大学が答へるとすれば、最初の教育のためには社会人が入学でき、教育をうけやすい条件を整へた大学院がふさわしい。第二の教育のためには学部レベルに社会人を入学させ教育するのがふさわしい。最後の教育のためには継続的な公開講座で対応するのが適切である。

## (2) 再教育のための教育プログラムの開発

これまで大学では十八歳から二十二、三歳の層を主たる教育対象としてきた。平成四年をピークとして十八歳人口が減少するが、先にあげた再教育の機会を大学がもうけるとすると、その減少分を補っても余るほどの教育対象がふえることになる。

しかし、問題は再教育のための教育プログラムをどうするかである。せいぜいアルバイトを通じてしか実務の世界に接触していない学生を対象とした教育とは異なる教育方法を開発していく必要がある。それはこれまでの学生に対する教育方法の改革にもつながっていくものと期待される。

## (3) 再教育のための関係機関の協力を得ること

再教育を同志社大学だけの力で実行することはむずかしい。関係諸機関の協力をえなければならぬ。京都府や京都市などの地方公共団体はもちろん、産業界や労働界の協力をえる必要がある。できれば、日本を越えて外国の大学や教育機関との協力も考えられる。たとえば、これらと共催で公開講座や出張講座を開設する。産業界や労働界から講師として出講してもらう。企業から大学院や学部にも再教育のために入学する社会人をだしてもらう。地域や産業界・労働界からの経済的支援をお願いする等々、その協力のあり方は様々である。要は、大学の中だけでなく、広く地域社会にオープンにした運営をはかっていく必

要がある。

## (4) 大学内の教員組織や事務体制の充実

地域社会にオープンにするためには大学内の教育体制を整備しておかねばならない。教員組織や事務局体制をきちんとしておく必要がある。社会人対象となれば昼間だけではなく夜間の教育が必要になるので、教職員の勤務時間への配属が十分なされなければならない。

以上四点について述べたが、今後より一層同志社大学が地域社会へのサービスと還元をおこない、University Citizenshipを高める努力をすることが、新島襄のめざした「良心を手腕に運用する」自治自立に富んだ「人民」(Citizen)の教育につながるよう配慮する必要がある。University CitizenshipによってCitizenを教育、養成することは、新島襄のめざしたものと一致するのではなからうか。

# キリスト教主義の再生を願って

森 章 博

(大学文学部教授)

新島襄先生生誕一五〇年に当たって先ず思うところは、彼の「同志社」設立の理想、教育理念の基盤がキリスト教に基づいたものであり、その同志社設立の精神を見失ってはならないということである。同志社の「将来像」について、日頃感じていることの中でとくにキリスト教主義について述べてみたい。ここではキリスト教と教育の関係が何よりも重要となるが、「宗教」と「教育」の関係は憲法に定められた信教の自由等の問題もあり、簡単に結論づけることは出来ないのである。

二五年前の新島襄第一二五回の生誕記念日に、私は「新島襄の心意気」と題して講演したことがあり、そこで「彼の生涯は矛盾、困難の連続であったが、キリスト教の信仰に依って多くの困難を克服していった。常に逆境に対する勇氣を持ち、自己のためではなく日本のためにこそ、キリスト教主義の学校を設立する必要があると考え、非常な困難にもめげず安易な妥協をしないで、毅然として「同志社」設立を実現した。」ことを強調

したのであった。今日、同志社の現状を顧みる時に多くの矛盾や困難をかかえており、その将来像を構築するに当たっては、このような同志社設立時の新島の生き方を重ねあわせて考えなければならぬと思われる。

新島襄は、同志社礼拝堂の定礎式で、教育は宗教と密接な関係にあり、教育の基本は宗教にあるといってもよい旨述べた。彼の教育精神は、その宗教観の上に立つて形成され發揮されて、宗教教育乃至徳育を基本とした彼独自の「教育学的信条」となったと私は思っている。

新島が設立した最初の「同志社英学校」は、それが当時の「学制」に基づく一私塾であったので、当然我が国の国体観を考慮してのキリスト教教育にとどめられ、それは日本国内の「同志社」であった。新島は開国進取の精神のもと、常に信仰と良心の尊厳性を尊重する近代的感覚を持ちつつ、我が国の教育思想に適合させていったのであった。内にキリスト教の崇高な信

念を持ち、教育理想としては、欧米文化成立の原理にもとづいてこれを十分に摂取し、そのことが日本の救国発展の道だと考えた。彼の救国の信念は強固で、そのためのキリスト教主義に依る教育精神の徹底は彼の最も力説したところであった。

しかし、現在においては「私立学校法」にもとづく学校法人同志社であり、一定の制限はあるものの、私立学校の特性としての自主性も尊重され、広くキリスト教にもとづく学校教育が認められている。また、国際人の育成がとくに重視されていることも念頭におきながら、同志社設立の精神を活かして将来像を考えていくことが必要となろう。

同志社教育の精神すなわち同志社精神の原型は新島精神にある。それは、「良心を手腕に運用する人物を育成する」ことであり、宗教的信仰を基礎に教育を行ない、自由・平等を尊重した。このキリスト教をバックボーンとした新島精神を正しく理解するためには、キリスト教とは何であるかを問うことが不可欠である。そのためには、一人でも多くの教職員、学生生徒達が、同志社生活を通して信仰を深めることが重要であり、それぞれの学校教育の場における具体的な計画がより必要となると思う。私が同志社大学に入学した年、同志社宗教顧問であったルー・シーベリー女史が離任に際して、同志社の教育目的として(一)キリスト教主義 (二)民主主義 (三)よい意味での愛国心 (四)内心の四つを挙げていたことを、四四年後の今日でもとくに感慨深く記憶している。このことはまさに現在及び将来にわたっての同志社における重要な教育テーマである。

明治二年九月施行の「同志社通則」には、「同志社はキリスト教を持って徳育の基本とする」と明記されている。「同志社大学設立の旨意」(明治二年一月)は新島のこの信条にもとづいたもので、我が国の教育史上斬新なものであり、一つの教育宣言でもあった。彼は、神を信じ、真理を愛し、人情を篤くするキリスト教主義の道徳こそが教育の根本であると主張し、そのことは当時の世の教育家と趣きを異にするものであると自ら認識していたのであった。そして、私学としての大学設立が、やがては国民に非常な感化を与え、国家将来の命運を左右するであろうと信じた。彼は、キリスト教の精神が骨肉化された欧米の文明・文化を取り入れることはもちろんのこと、これらの知識や技術を道徳的に運用することの出来る人物を育てなければならぬと考えたのである。新島のこの考えは、キリスト教主義についての絶対普遍的信念であり、この信条を理解しなければ、彼の同志社設立の真意は判らないのではないだろうか。「同志社大学設立の旨意」では、大学は決して宗教の機関ではないと述べてはいるが、新島のこのような信仰が同志社精神を基本的に形成していることを決して忘れてはならない。万一、これを軽視または見失うことがあれば、新島が意図した同志社教育独自の特質は活かされず、その存在意義は次第に薄れていくこととなる。

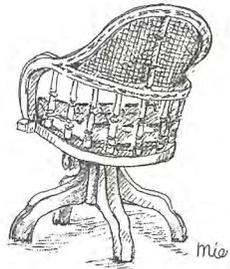
「私立学校法」にもとづく同志社は、私立学校の特性によってその自主性を重んじ、公共性を高めることに依って、将来にわたり「同志社」の健全な発展を図るべきであろう。そして、

他のキリスト教教育を掲げている諸学校と一層の協力をし、私立学校の一つとしての力量の限界をわきまえつつ、具体的な教育計画をたててそれをひとつひとつ実現し、現状を克服していく必要がある。同志社設立の精神にもとづく独自の校風と学風が、一七七年間の関係者の尽力に依りそれなりに継承されてきていることは感謝であるが、現在の同志社諸学校は次第にマスパロ化し、同志社精神が形骸化されつつある面も多い。このような現状を踏まえた時、私達同志社人は、同志社教育の目的を自覚しそれぞれの場で同志社精神を発揮するよう努力しなければならぬ。

同志社には大学院、大学、高校、中学校、幼稚園、各種研究所等があるが、一貫教育の立場からもまた同志社精神の感化の上からも、幼少時からの一貫性が必要であり、同志社小学校の創設がぜひとも望まれる。さらに長期的展望としては、現在大学の学部にはない学部の増設が望ましい。現在では、高校まで同志社教育を受けた生徒が希望の学部がないために他大学に進むことも多い。私達は、一貫教育に依る感化を重視してその成果に誇りを持ち得るような、「同志社でなければ出来ない教育」を行ないたい。そして、現在みられるような、世間的評価を受けて私学よりも国公立大学への進学により期待する風潮が改められるように、同志社学園の教育・研究の質を高めていくことが大切であろう。

現在、大学設置基準の改正に伴い、同志社大学もカリキュラムの改正等教育研究の充実を計り、種々の委員会で検討してい

る。その中で「同志社大学キリスト教文化センター」の設置が実現に向かいつつあることは、同志社大学の「キリスト教主義の再生」のために望ましいことである。その開設は、大学のみならず同志社の諸学校並びにキリスト教学校教育への刺激となり得ることを信じている。キリスト教文化の研究が新しい組織でより深められることは、何よりもキリスト教教育の推進に役立つものとして期待されるのである。



# “志”の復権を

—とくに福祉の領域から—

## I

いまごろ「青雲の志」といったイメージにもかような「志」論などなんのことかといわれそうである。同志社だからあつていいとも思う。そして、同志社にいま志が立っているか、否か、なぜ志なのか、私たちは、すでに志の輪廓もぼやけ、その意味内実も定かではない時代と状況に生きていることにもかかわる。しかし、新島門下「襄の志」といえば同志社につらなるものには体が応え、心が応えることもたしかである。私はこうした反応もふくめて志は喪失しつつある、このままでは消滅するかとさえ考えることがある。私自身も、まわりの人々たちもこのあやうさに気づいているとはいえない。これは自省の弁でもある。同志社も「巨大」になった。「志」といったものは人と人とのつながりのなかで、どこか緻密に設定される「場」にみいだせ

るものかも知れない。いくたびも語り継がれて郷愁のようによき日よき時代の同志社、その源流としての新島襄の生きた同志社創始期の状況がある。むかしを今になすよしもがなという処でそうした緻密な状況を復原してみせるだけではどうにもならぬ。緻密に対置して粗放というのがいま私たちがおかれている位相である。この現況のなかで志の復権を問うことが可能か、そのための方途はなにか、いい選択や仕方がかんたんにみいだせるものではない。私は志の復権を問うというコンセプトで二十一世紀にむかう同志社を考えてみようと呼信しているの、これへの応答を期待している。

室田保夫氏(高野山大学、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題(C・S)研究チーム)の「一国の良心—新島襄、ラーネツド、ペリーそして石井十次」(同志社社会福祉学・第六号所収)は、私のいう「志」をよみとくうえて大変に参考になった。新島襄は「不言にして化育」するといわれたが、それもあるとしても、

小倉 襄 二

(大学文学部教授)

新島のメッセージは鮮烈である。キリスト者、新島と神によるコトバとしてのメッセージは信仰と確信のなかくつきりと表現されていて、それを聴くものは立志、志を發起する外ない羽目になる。

室田論文によれば新島の一八八六(明治一九)年九月二〇日、大日本私立衛生会京都支会開筵のメッセージに、

己ヲ愛スル如ク人ヲ愛スベシ(中略)真ニ基督ノ意ニ叶フ(中略)文明諸国二人タカ多分ノ金ヲ投シテ病院、貧院、幼院、顛狂院又ハ看病婦学校等ノ設ケアルハ、社会ノ為ニ計ル所ノ純乎タル慈善心乃宗教心ヨリ起リテ、人ヲ助ケ人ヲ救フヲ以テ目的ト為ス(中略)而シテ此目的ハ基督ノ人ヲ愛(セ)ヨト云フ教ニ原因スさらに同志社病院、看病婦学校の設立に及び、「此校の目的ハ第一にハ病人ノ苦痛ヲ救フ。熟練ノ看病人ヲ養成シ、病人ノ心ヲ慰ムル事カ甚大切、次のメッセージは、其ノ志操ハ大丈夫ノ如ク心ヲ真理ニ委ネ身ヲ天命ニ任せ、キタナキ事モ、嗅キ事モ、キロウヘキ事モ、驚ロシキ事ニ少シモ辟易セス、従容トシテ其ノ職務ニ従事セハ、如何ニ失望シ易キ病人モ必ラス心ノ慰ヲ得ルニ至ルヘク、遂ニハ己カ身迄モ天命ニ任せテ安心スルニ至ルベシ」と。

志への道は多岐である。私も人文研・C・S・S・研究メンバーとして社会事業史、つまり福祉の形成史に関心があるのでこの側からいうとこのような志を發起させる鮮烈なこの新島のメッセージのことを今に同志社の「志」の原点としてとらえたいと

考える。このとき新島の構想した医学部への希いも当然このメッセージの志に応答し触発される人材養成にあつたといえよう。この新島の志が具現しておれば日本近代医療史の展開はすこしはちがったあゆみになったかも知れない。この領域は達成できなかったが私のいう「同志社派」ともいふべき福祉史を形づくる有名、無名の社会事業への逸材の輩出は新島の志に真摯に応えた人々の系譜といふべきである。ここに一つの「志」の復権のかたちをみたい。

## II

一九六〇年代に佐藤忠男氏は『斬られ方の美学』(筑摩書房刊)で映画評論からおもしろいことを指摘している。「実は、日本人にとつて隣人愛というものは最も表現しにくい思想の一つなのではあるまいか、白樺派、赤い羽根、救世軍、C.S.S. 真顔で隣人愛など語る奴は、よほどのお人好しか偽善者に違いない。というのがむしろ庶民に一般的なイメージだ、慈善はすなわち偽善だ、利害関係がぎつしりと入り組んでいる日本の社会では、代償を求めずに行なわれる隣人への好意的行ないの範囲は限られており」と。この九〇年代ではいささか事情はちがうと思うが、明治・大正・昭和の三代における状況指摘としては、ほぼ妥当する。幕藩制にも志士仁人の慈善の事実があつたが佐藤氏のいう庶民レベルの状況は慈善は偽善、面はゆさの行いとみる情念は決して過去のことではない。新島襄のメッセージはこの

時代と状況に対して一つの衝撃であり、臆せずその志をのべたアピールでもあった。

私は同志社の福祉についての系譜をたどるうえでやや便宜的に「底辺にむかう志」とよんできた。異質の、キリスト教文明、その教義、隣人愛、キリストにおける兄弟愛の表明、いたみと小さく、貧苦のものとの友となることからの思考と実践へ、慈善事業から感化救済事業へ、社会事業段階から今日の社会福祉事業へ、同志社創立からの明治・大正・昭和・平成の今日までわが国の佐藤忠男氏という風土の只中で新島襄による「底辺にむかう志」にむすばれた有為の逸材が深く広い事蹟を近現代史に刻んでいった。ここでその事蹟の詳細を語ることはできない。

留岡幸助、山室軍平、石井十次、あるいは安倍磯雄らを巨峯として多くの著名、無名の底辺にむかう志を軸に福祉への事蹟が連綿とひきつがれ多彩に展開した。近代の社会問題を考察するときこれらの人々の思想、実践をヌキにして語ることはできない。ここに同志社のアクセントの重い領域があり、同志社が創立以降に発信しつづけたもつとも大切な志の内実が籠められているといえないだろうか。留岡幸助の少年教化、感化の仕事、石井十次の孤児救済、山室軍平の娼娼運動、安倍磯雄の社会改良運動それらを重点として彼らのたちむかったのは、「下層社会」とよばれた惨たる日本近代化の底辺にかかわる問題の領域であった。あぶれもの、破綻者、被差別、虐待、癩疾、貧苦、いざれも、誰もが回避したい巨大な「構造」としての社会問題でもあった。表層に対する「下層」であって、新島のアピール、そ

の伝統のゆえにこうした先人たちは表層―権力からの抑圧にも、自身の労苦をも省りみずにかかわりつづけた。

「ゆたかな社会」という文脈で動いているがしかし、人の世のくらしのなかに必ず「底辺」はありつづける、「下層社会」の意味も推移し、一人一人の「惨苦」のかたちも変容する。あらためて同志社に「志」の復権を問うならば、どのような場においても、先人たちがかわりつづけた底辺への志、「襄の志」をみずからの主体、見据える視座としてたしかめてみてはどうか。

私は学際科目として共同で「人権と差別」を担当、「社会問題」「社会保障論」などを通して同志社のアクセント、必然性を語ってきた。レポートなどにみる学生諸君の応答には未知のことだったからさらにつよく知り考えたい。同志社での学びとしてさらに深くという記述が散見される。これは、研究・教育からみて決して福祉領域だからといった狭いものではない。人権もキーワードだが「同志社での学び」から志を待て現代にどういう場にあつてもあつて欲しい「持続する志」のようなものである。直接には私も所属する文学部社会科学科、社会福祉学専攻において専門教育として学部、大学院で福祉の分野での役割を担っている。私たちの願望ですでに検討をはじめているが、さきの新島襄の医学部、病院、看護学校をといて志をいまに具現するものとしていつの日か、「総合福祉学部」とか「人間保健福祉学部」といったかたちで実現したいものである。これは同志社らしいもつともふさわしい構想であり、私のいう「志」の復権の拠点ともなるものではないかと期待とともに考えている。

# 新島の教育思想の現代化

シュペネマン・クラウス

(大学文学部教授)

新島は十九世紀の米国のキリスト教主義カレッジで具体化された人間教育を目指すりベラル・エデュケーション（自由教育）の思想を同志社の設立によって、日本で応用しようと試みた。

これは、当時の明治国家体制下にあつて、いわば、天皇や国家の命令に盲目的に服従する没主体的な人間を育成するのが普通であつたことを考えると、画期的な事であつた。すなわち、新島は彼の理想とする教育によって、個人は自主的な人間となり、その人間が自らが属し、愛する国家に尽くすようになると思へたからである。

彼の主張するリベラル・エデュケーションに基づいた教育は、個人を中心とした「人間形成」の育成を主眼においたというよりはむしろ、社会、政治、国家に主体的にかかわり合つていく個人の教育にその力点があつたような気がする。米国の民主社会の中で重要な役割をはたしたりベラル・エデュケーションが、日本においても、その近代化と民主化の為に不可欠であると、

新島は考えていたのである。キリスト教倫理を基盤としたその教育によって、主体的に社会や国家にかかわりあつていける、言い替えれば、日本の民主化に貢献出来る個人を生みだそうとしたのであろう。

しかし、新島の目指した教育を現代社会において実現しようとする、おもに二つの重要な問題がある。その第一は、教育が現代社会において、当時よりもはるかに、「形式化」「組織化」そして「機能化」されてしまつていくということだ。小、中、高校の教育がおもに進学の準備段階と化しているように、大学の勉学は就職の前哨戦になつている。そのような、教育の「社会的な位置づけ」は、どの国でも、重要な役割とみなされているが、特に日本における高等教育の優位性は、進学制度と職業準備教育制度によるところが大であらう。具体的にいえば、学生達は、いわゆる、良い学校や大手企業への就職のために勉強しているが、実際の社会の中で彼らの知識など、ほとんど役

にたない事を知っている。しかも、いちど、「良い」学校に入つてしまえば、卒業や就職はほとんど保証されたようなものだから、勉学に関心をもつて、意欲的に努力するのが無意味になつてしまふ。

このような教育の「形式的機能化」は、実際にもう一つの問題をはらんでいる。それは、社会学が「合理化」とか「生活領域の分化」と呼んでいる現代社会の特殊な現象である。現代社会は、政治、経済、学問、学校、家庭などに分化され、私生活以外の領域では、経済に代表される近代の合理性に支配されている。その結果、個人生活やその道德観が「私化」され、個人生活以外の領域ではほとんど応用されることがない。そこに新島が目指した自由教育の現代における実現の最大の難所がある。現在、大学教育は、宗教やほかの世界観と同様、「個人化」され、「趣味化」されている。学生は幼児からの受験勉強の延長化となつた家庭を通して、「社会は固定化している」とか「自分は無力である」との実感をもつてしまふ。だから、社会への適応の方が社会の変化を考えるよりも、現実的である。このような学生達を前にして、教員達は一体何が出来るだろうか。さまざまな授業への工夫が必要になつてくる。

また、他方、新島教育の実現のために、大学の基本的な革新が重要になつてくる。何よりも、社会はそれほど固定化しておらず、個人と個人のつながりかたしだいで、変革も可能であることを、学生に体験させることが必要でないか。そのために、大量生産的な大教室での講義のかわりに、ゼミ形式による、学

生の発言と討論を中心とした授業を増やす必要がある。ここで、学生は自らの力を培う事によつて、自分も社会の変革のいつたんを担う事ができるのだとの確信を得る事が出来るだろう。日本の教育が、伝統的に上から知識を植え付ける事に専心してきたことを思うと、それは、いわば「批判的教育」といえるかも知れない。しかし、新島の主張する、民主的社会への貢献には、それが要求する正しい批判力や判断力を持った人材の育成が大学以外のどこでできるのであろうか。

第二に、大学は専門的知識を教えるだけでなく、学生が今、生活し、そして、後に活躍する広義の社会を主題にする必要がある。しかし、専門分化された諸学問は、カメラで見つるように、狭い見方しかできない。そこで、幅の広い見方を、学生達に教えるため、学際的な講義が不可欠となつてくる。それは、現在設置されているような、それぞれの専門的立場から意見を述べるとする「学際科目」ではなく、もつと共同研究にもとづく、本来の意味での学際科目である。ここで、学生達は、それぞれの学問の基本的な方法論を把握し、意欲的な生き方を身につける事が出来るようになる。

第三に、同志社内の推薦制度の見直しが必要である。この推薦制度によつて、配分されてくる学生達は、いくらかの例外もあるが、概して、勉学への意欲に乏しく、また、成績によつて回されてくるせいにか、その動機も薄い。一般から、入学してくる学生たちにとつて、彼らの存在が奇異にうつることもしばしばである。ここに、現代日本の教育の縮図があるような気がす

る。このへんの改革をして、意欲的に、学問に取り組み将来の社会に貢献できる学生をはぐくむ土壌を作る事がないと、新島

の目指した教育は、単なる看板と化してしまふであらう。

## 同志社の盛衰

住谷 馨

(大学文学部教授)

新島襄は「教育は二百年の計」といった。時の流れはますます早くなっている。二十一世の展望もままならない。ましてや二十一世紀後半の同志社教育がどのようなものか、だれも予測はつかないだろう。ただ、同志社はキリスト教主義の教育をモットーとしている。キリスト教文化が存続するかぎり、同志社はさまざまな盛衰を繰返しながらも存続していることと思う。残念ながら、そのときに現在のわれわれ教職員、学生諸君の多くは地上から去っている。

私は文化は一代目、二代目、三代目という目のとどく範囲でさまざまに存続していくと思っている。祖父母の時代の文化は孫にかろうじてうけ継がれる。それには、もちろん多くの変革があるが、同志社も三代文化観で視ると創生期と衰弱期と戦後の盛隆期と大きく分けられる。創生期には熊本バンドの優秀な

学生に刺戟されて多くの社会的人材を輩出した。まさに「良心を手腕に運用する」先輩が明治から大正にかけて社会に輝かしい貢献をした。社会主義・労働運動の父といわれる安部磯雄をはじめ、社会思想に大きな影響を与えた「社会主義研究会」のメンバーには村井知至、岸本能武太など、安部磯雄と同じ同志社英学校明治十二年入学組みで、また、学会、教界に貢献した原田助、堀貞一、亀山昇、大西祝、綱島佳吉も同期であった。彼らは明治、大正とキリスト教界に開拓的な働きをしている。しかし、その当時、同志社は宣教師の確執、軍部の介入、財政的な問題でゆれ動いた。同志社の卒業生は母校の危機的状況に大きな支えとなっている。その間の事情は「同志社百年史」に詳しいのでこの小論では除くが、このゆれ動いた同志社は一九二〇年に東京霊南坂教会牧師海老名弾正を迎え、学内の安定が

図られる。この海老名時代は同志社デモクラシー時代と称せられるほど若い学究が集い、大学としての学問的水準を上げていく。また、海老名の人柄、信仰は八年の間ではあったが学内の教職員、学生に大きな影響を与えた。その後、時代の暗い変遷とともに同志社教育も沈滞せざるをえなかつた。同志社内部には理事会と教授会の対立があつたり、右翼や軍部の抑圧をうけつづける。昭和の初期から第二次大戦の終結に至るまでキリスト教主義同志社の苦難な時代であつた。同志社女子高等学校長の末光信三は下鴨警察署で「お前はキリストと天皇とどちらがえらいと思つているのか」などという野蛮な特高の追及をうけた事実も語りつがれている。その時代はまた岩倉の校地問題、湯浅八郎総長の「神棚事件」「団体明徴論文事件」など相次いで世間の注目を浴びる問題も起こつている。キリスト教の大学はいずれにしても衰退せざるをえない時代であつた。湯浅八郎はアメリカに亡命し、この暗い谷間は第二次大戦の終結するまでつづく。この戦いには日本の学徒は動員され、多くの犠牲を払ひ、大学自体も右翼化する傾向が強くなつていく。それは同志社の三代文化の歴史観からみて大きな衰退期といえるであろう。

終戦を迎えて、大学の自由は蘇つた。同志社大学はアーモスト大学をはじめ敵国であつたアメリカとの交流は創設期以来深いものがある。戦後、間もなく来校したオーテス・ケーリーはその若々しいアメリカの息吹きを同志社の学園にふきまき、同志社の創設期の再来を感じさせた。学舎は戦時中のまま、さびれていたが、わが国のめざましい経済復興とともに明徳館が設

立し、学内情勢は一年々、装いを新しくして、学生数も激激に増加した。マス・プロ教育という批判を浴びる大学の状況は同志社も例外ではなかつた。しかし、学内は活気に満ち、大学への入学率は年々男女ともども延びる一方である。大学は次々に学舎を増築し、また、学生数を増やすという悪循環に陥つたが、同志社は他大学に較べ敷地も狭く、文部省の規定以上には拡大することはできず、物価への高騰やオイル・ショックといわれる不況の影響もあり、授業料問題や学校行政、マス・プロ教育反対の声に端を発して大きな大学紛争へと突入した。教室は破壊され、機動隊は入り、その惨状はすさまじいものであつた。この紛争の最初は東大、京大であり、学生の変革へのエネルギーは激烈なものがあつた。これも大学を発展させる戦後の大きなエネルギーであつたかも知れない。沈静した後の大学は紛争の影を次第になくして、いまにみる新しい個立化した学生、教職員へと変貌していった。学友会活動はその激しさをひそめ、一般学生は学生運動に無関心を示している。

この期に同志社は田辺学舎を建設した。この広大な学舎は、今出川学舎の古くて狭く、馴れ親しんできた学舎と全くちがう自然に囲まれ、緑が深く、学生が集うに適した芝生や広いグラウンドが幾面もあり、まさに同志社の隆盛を誇るような観のある学舎である。この新しく壮大な学舎をもつ同志社は私学としての一つの風格を兼ねそなえたといえる。創立一一七周年を迎える同志社大学は今出川学舎と田辺学舎をもち、新旧特徴ある学園となつた。

しかし、問題はこの現状から問題を発生している。この小論で少し過去を振り返り、三代文化論などを述べたが、五十年単位に大学の歴史をみると、隆盛期は創立百周年以降から始まるといつてよい。田辺への新天地を求め、現在の田辺学舎と今出川学舎の将来像、理想と理念について考察しなければならぬ。この小論はその将来像・理想像を描くのを目的としている。現状のままで同志社は時を過ごしてよいのか、新しい構想をこの両学舎に描くのか、現状のままで教職員、学生は充実した学園生活が送れていると思つていいのか、田辺学舎が充足してから、次第にこの新しい学舎のあり方に不満が出ている。広大な敷地は学生の移動が容易でなく、食堂街は結構であるが学生食堂全体からみると学生の昼食を満たすには小さすぎる。小さい難を数え上げればまだまだ挙げることができよう。田辺学舎にはいかなる同志社教育と理念を目的として設置されたのかという基本的な問題まで考えざるをえなくなる。地下鉄がつき、今出川と田辺の交通の便は非常によくついている。また、興戸の駅から学舎までの登り坂も若者の体力増強には向いている。病弱な学生には興戸の次ぎの駅三山木から循環バスが出ている。私は田辺の設置条件には難はないと思つている。現在は工学部の四年制の学舎が建設中である。私は一・二回生が田辺で、三・四回生が今出川という、この上下二つに分断された教育方法に大きな疑問をもつ。この分割案が教授会で報告されたときから、私はこの分割案に反対する発言をしてきた。このままでは四年制の総合大学を短大に移行させるようなものではないか、学園

生活の主要な課題であるクラブ活動やサークル活動、体育会の活動など、四年間のまとまった団結・組織が不可能になるのではないか、田辺で二回生を終えて今出川学舎に移行したときは四回生はすでに卒業している。一回生は熟練した四回生の先輩に会うことも、指導を受けることもない。三回生は一回生二回生は遙か彼方の田辺であり、その交流はむづかしい。なお、大切な四年間を通して専門の教師と学生の交流もおぼつかない。現在、学生の不満は、これらの諸点に集中している。また、現在、教育機関は地元のコミュニティーにも大きな貢献を果すことが期待されているが、田辺では、それが可能か。学舎は五時過ぎになると人氣が無くなる。大きな暗い建物が聳えているだけである。活気が失われている。同志社の隆盛期には大きな問題が残つた。今出川学舎は社会に対し、社会人教育、地域社会への解放が望ましい。各学部の孤立化は学園全体の課題を背負うことがむづかしくなっている。学生は教授の講義が面白くないからサボルといい、教授は学生の出席が悪いと苦情をいう。大学のこの空洞化はわれわれすべてがこれだといふのかという不安と疑問を抱いている。大学の再編成と新学部構想が今後の将来像として描ければよいが、同志社はこのままでは内部的に混乱した衰退期を迎えるのではないかと危惧している。田辺学舎に見合った大きな構想をもつ必要がある。私は各学部が話し合う、大学院大学が創設されてもよいと思つている。大学はあまりにも専門分化しすぎていて、総合大学としての統合を見失っている。同志社の伝統に居坐っているかぎり、発展はない。

# 次は「新島センター」を

本井康博

(大学文学部嘱託講師)

新島襄は「冬の子」である。誕生が二月、そして永眠は一月であった。その間の四十七年間の生涯は、まさに、「敢えて」風雪を侵して聞く「寒梅」そのものであった。しかも「争わず」また「力めず」、である。

愛弟子だった徳富蘇峰は言う。新島の傍らにひとたび立てば、「自分の襟も袖口も、体全体までがよき香にうたるるが如き」思いにひたれた、と(『蘇峰感銘録』五七頁)。

新島が大磯で永眠するや、ただちに伝記の出版計画が立案され、執筆者にJ・D・デイヴィスと蘇峰とが指名された。衆目の一致する人選といえよう(拙稿『新島襄と山室軍平』二八頁、『新島研究』七九)。

しかるに、デイヴィスによる英文の伝記は早々と上梓されたにもかかわらず、日本人の手になる伝記は十余年を経ても遅々として進まなかつた。思いあまつてある人が蘇峰に催促したところ、彼は「先生のごとは十年や十五年経つても決して人が忘

れるものではない」と切り返したという(『基督教世界』一九〇五年一月二六日)。

さらにそれより十数年後。今度は山室軍平が蘇峰に執筆を懇願した。それに対して蘇峰は、「新島の真骨頂が宗教にある以上、棄教した自分には書けない。牧師の柏木義円が最適任者である」旨の返事をして、自ら執筆することを固辞した。蘇峰から推挙された柏木も当初は逡巡した。が、最後は山室や蘇峰の熱意に押されて承諾した。

しかるに、蘇峰も柏木も、そして山室も新島伝を完成することなく逝つた。かくして新島をもつともよく知る愛弟子たちの手による新島の伝記は日の目を見る事なく終わった。

蘇峰には、伝記に頼るまでもなく新島は容易に人に忘れられるはずがない、との自負があつたようである。が、悲しいかな。時の流れは新島をも流し去る。「去る者、日々に疎し」である。

今回、新島や同志社にもつとも近い新聞である『キリスト基督教世界』

と『東京毎週新報』とのバックナンバーを繕き、新島の記念日にあたる一月と二月の紙面を永眠後の五十年間（八九一年—一九四一年）にわたって悉に検索してみた。結果は予想通りであった。新島関連の記事は年々、確実に減少している。

それでも後半期の中で突出しているのは、堀貞一による同志社特別伝道（一九二七年一月）と永眠五十周年記念運動（一九三〇年一月）の記事である。

とりわけ前者の特別伝道は、堀が「新島精神」を高揚した結果、三百三十八人もの受洗者が学内に生まれたことでよく知られている。見逃せないのは、この期間中に若王子山の新島の墓前で開かれた永眠記念日早天祈禱会——それ自体は毎年の恒例であるが——での出来事であった。

この日の集会のために特に用意された「新同志社建設の盟約」なる文書が中島重によって朗読され、その場の参会者、二百八十六人が署名を寄せているのである。きわめて異例のことと言わねばならない。

「盟約」は、「我等は実に同志社の維新を為さんとするものなり。我等は実に同志社の精神的革命を実現するものなり」と高らかに宣言する。同書は堀の伝道に触発されたものであることは言うまでもないが、同時に、創立五十二周年を迎えて、新島の志が「漸く忘れ去られんとする危機に臨んで」、いる、との危機意識が生んだ代物でもあった（『基督教世界』一九二七年一月二七日）。

一九九三年冬。この「盟約」からもさらに数十年が流れた。

新島の誕生から数えればまさに百五十年。永眠からでもすでに一世紀をこえる。

永眠百周年を迎えた一九九〇年以来、今日にいたるまであしかけ四年にわたって、同志社は「新島ルネサンス」とでも呼ぶべき創立者記念の大事業を全国的に展開してみせた。規模といい、期間といい、まさに画期的なイヴェントである（拙稿「新島ルネサンス」、『同志社教会月報』一六〇。企画と運営にあたられた同志社本部の大英断とご苦労とに対し心からの拍手を送りたい。しかるに、半世紀前のように学内からは「同志社の維新」や「精神的革命」の声は挙がらずじまいである。なぜか。堀のような、新島を直接知る愛弟子が皆無となつて久しいことだけは片付けられない。

実は、あの時、堀をハワイから招いたのは「同志社の心臓」たる同志社教会であった。この教会の創立五十周年記念運動のためである。新島の借家の応接室で呱呱の声をあげた同志社教会（西京第二公会）は、学園とはまさに「一心同体」であった。「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」である。堀によるあのリバイバル（信仰復興）や「盟約」は、学園と教会とが「両者併行」して事にあたつた結果、初めて日の目を見ることができたのである。要するに「祈り」の力が大きかった。

今や、その同志社教会は学園から切り離されてしまった。法的に別法人（宗教法人）であるばかりか、最近は人的にも関係がうすれつつある。たとえば、同志社の役職者が会員名簿から消えて久しいが、現在では教会役員の中にも同志社大学の教職

次は「新島センター」を

員の名を見つけることができない。教会と学園とが「一心異体」になりつつあるのである。大学キャンパスに集案案内ひとつ掲示できない教会は、「同志社の心臓」たりえない。

かつて新島の永眠二十五周年記念会（一九一五年一月二十三日）のためにわざわざ同志社チャペルに足を運んだ「旅の人」（名前は不詳）は次の失望を残している。

今の同志社を思ひ、二十五年前世を去った新島先生を回顧して、悲しい深い感慨を抱きながら、今は昔と変わって建築ばかりは堂々として旧都の北隅に聳えている同志社の校内を辞し去った。霊界多事。更らに偉大なる第二の新島襄は何処から現はれることであらう。（『福音新報』一九一五年二月四日）

「旅の人」は旧日本基督教会の来賓、したがって、同志社の卒業生ではないのではないか。けれども、彼が今、同志社の田辺キャンパスに降り立てば、と推測する心は複雑である。

「冬の時代」を迎える私学にとつて建学の理念（同志社の場合は新島の「志」）は生命線である。今回の「新島ルネサンス」を一回限りのものに終わらせないために強力な「心臓」の復活が望まれる。外部団体の同志社教会に多くを望めない以上、学園内に（名称はともかく）「新島センター」を設置することが急務ではないかと思われる。

このセンターは単なる顕彰や保存のための入れ物に終わってはならない。あくまでも総合研究や共同研究を重視する機関で

あってほしい。すでに『新島研究』（八八、一九九〇年誌上の座談会、「新島研究をめぐって」で「全同志社の新島研究機関の必要性」が一致して確認されている。気運と必要性とはさらに高まっている。

ひとつには『新島襄全集』の完結に近い。ようやく本格的な新島研究の時代が到来するのである。これまでの新島研究は形の上では個人の「片手間仕事」に頼らざるをえなかつた。これでは本格的な新島伝など望む方が無理というものである。

これまであちらこちらで個別になされてきた事業や研究を一元化し、「新島学」を構築する道が模索されないものであろうか。新島と同じ志をもって同志社づくりに邁進するためにもそれは不可欠の作業ではないだろうか。

「新島センター」は、学園の根源、すなわち同志社を同志社たらしめるものを明示し続けるであろう。同時に、「寒梅」の芳しい香りを学園の内外に放ち続けてくれるに相違ない。「冬の時代」に向かって「敢えて」挑戦する新島ゆずりの進取の気風に私は期待したい。

# 「最」 高等教育の基盤確立

安 枝 英 紳

(大学法学部教授)

学校を支える三要素は、(1)教職員、(2)学生、(3)施設である。同志社は、これら三要素の将来を見すえた中・長期的なビジョンの下で、「最」高等教育の基盤確立を目指し、確信のある途を切り拓いていくべき時にある。

## 一、人材育成の理念

同志社が育成すべき人材は、「社会への貢献」を自問自答しながら生きる人物である。聖書における言葉は、「地の塩となれ」であるが、世の為・人の為に尽くすためにはどのように生きればいいのか、何を準備すべきであるかを常に確認しながら歩みを続ける人物が望ましい。なかでも国際社会への貢献を考える人物の輩出を準備すべきである。

このような資質を身につける青年期においては、正義的観念を養い、私心なき人物たらんことを誇りとさせ、評価基準や価

値基準の多元性を認識させる必要がある。

同志社が理想とすべき人材を育て得たか否かの検証は、人生を了えようとするその時期にはじめて与えるべきであろう。

## 二、研究業績の尊重

学校法人同志社を支える三要素についてはすでにふれたが、大学および大学院に対する社会的評価の鍵は、研究の質にある。(1)どのような学者が同志社から育ったか、(2)どのような研究業績を同志社人が発表しているか、(3)どのような研究者を同志社が擁しているか、これらのテストが大学・大学院評価の決め手となるはずである。しかも、これらの評価は、マスコミ等におけるそれではなく、専門家集団や学会レベルにおける評価であることに留意しなければならない。本格的な研究は、しばしば時間を要し、華やかさに欠ける場合が多い。しかし、これら

の研究者あるいは研究業績への尊重と高い評価をしようだけの雰囲気醸成されていなければならないであろう。このような配慮を怠って表面的な社会的評価に目を奪われると、やがてポディー・プロウの効果を味わうことになる。自主評価・自主点検も真実の質の発見を基礎とすべきである。

このように考えてくると、とくに大学および大学院においては、研究体制の整備と研究条件の充実が足腰を強くするための大きな課題であることに気づく。他方で、主体者の側も、同志社に奉職している限り、その地位と条件に甘んじることなく、身を賭して研究に精進することを忘れてはならない。授業のコマ数と雑用の多さは、現代の私学の宿命の靚があるが、改善できない問題というわけではない。

### 三、大学院の拡大・充実

わが国における将来の高等教育制度は、大学院を中心とするシステムに変動するであろう。これほどまでに高くなった大学進学率の下では、もはや大学を最高等教育と位置づけることは、質および量の両面において不可能となつてきていることは、誰の目にも明らかである。オフィス労働と管理業務を旨とした大学卒業生の増大は、わが国社会の労働力構成の適切さを失わせしめる危険があり、競争の論理の限界を超える可能性がある。かつて旧制高校制度から、新制大学制度に移ったときのような大きな地殻変動が生じているとみてよいであろう。少し大胆

な例えでいうと、大学院博士課程前期の二年間（修士課程）が真の意味での学部に関連した性格を有し、大学院博士課程後期の三年間（博士課程）がこれまでの大学院に相当する位置づけとなるであろう。したがって、大学の教員や研究所志望の者は博士課程後期にまで進学することが予定され、社会や企業が要請する高度の教育を受けた者としては博士課程前期において文字通りの高等教育を受けることが予定されることになる。そのためには、大学院にまで進学しない人たちの職業観として、わが国においては、「職人」思想の尊重と復活が必要となってくる。

わが国の企業は、従来、ゼネラリストの育成を主目的とし、採用後にトレーニングを施すことによつて必要な人材を満たしてきた。しかし、より高度化、専門化した知識や能力を必要とする人材へのニーズが高まるにつれ、学校教育にその一部を担つてもらう必要が生じており、ゼネラリスト七割、スペシャリスト三割程度の割合で採用計画を立てる企業が常態となるであろう。

こうした状況の下で、大学院教育の果す役割は増大し、しかもその多様化が必要となってくる。学部卒業生とともに大学院修了者を企業や官庁に送り出すことに加えて、社会人のためのリフレッシュ教育の要望にも応えていくことが必要となる。

同志社としては、このようなシステムの構築を示すシンボルとして、大学院棟を建設することが緊要である。シンボルにふさわしい設備を整えたものが望まれる。さらに、今出川校地の立地条件を活かし、これを大学院教育の拠点とする中期構想を

計画すべきである。

#### 四、学校経営と教育・研究の分化

同志社がさらに発展し、その基盤を堅固にしていくためには、経営面での中・長期的な展望も不可欠となる。この経営基盤の確立は、理事会が役割を担うべきである。そのことにより、学校経営と教育・研究が組織的、機能的に分化していく必要がある。もちろんマネージメントにたずさわる教員層も選出され、学校経営が教育・研究のためになされることの理念が保証される機構にしていく必要があるが、通常の教員や教授会の果たすべき役割と経営の役割とに一線を画すことが望ましい。

そのためには職員層の人材育成を図るとともに、少し思いきった責任と権限の付与を実現し、学校経営に能力を発揮する職員層の出現を期待しなければならない。学校職員には、教員と生徒・学生達との接点に位置し、教育と研究を直接的に助力する層を形成する人達とともに、経営に手腕を発揮する人達も必要となってくる。その他の職種層の育成をも含め、要するに人材の多様化と質的向上が図られなければならないわけである。そのうえで職員層の仕事の成果に対しての適切な評価システムを生み出すように努め、とくに若い職員層の仕事への意欲を高めなければならぬであろう。職能給や職務給の導入も検討し、年功序列型賃金の思いきった見直しも将来の構想の中に含めるべきである。



# 同志社における経済学の教育

森 一夫

(大学経済学部教授)

日本で最初の本格的な経済原論の講義

「右手に聖書、左手に経済学」という意気込みで、明治十二年にラーネッド博士が行った講義が、同志社における経済学の教育の始まりである。

このラーネッド先生 (Dwight Whitney Learned, 1848-1943) は、イエール大学を一八七〇年に卒業され、三年後に Ph・D を得られた学者・宣教師である。明治九年四月に同志社英学校に着任され、同志社大学の初代学長で、昭和三年まで五二年間も同志社の教育に文字通り献身された方である。

この時期に講義された内容は、自由主義経済学で、「経済学新論」(二八八六年大阪「任天堂」と「経済学之原理」(二八九一年浮田和民訳「東京経済雑誌社」)の二冊の本として残っている。このことが本格的な経済原論が、日本で初めて行なわれたのが、同志社であるとされる根拠となっている。

後に、十三代日銀総裁になる深井英五は、明治二十五年の卒

業で、英語で行なわれた経済原論の講義を聞いた学生の一人である。また、ラーネッド先生の本が、旧制の第一高等学校で用いられた事実をみても、この講義が日本経済にあたえた影響の波紋は、かなり大きく広がって行ったと想像しても良いであろう。

その後、経済学の講義は小野英二郎先生、明治三十年より本田精一先生、明治三十六年から米田庄太郎先生が担当されている。しかしながら、この三人の先生方がどのような研究者で、どのような講義の内容であったかについては、まだ調査がなされていない。

この明治の三十年代の頃までは、経済学の専門の先生はいなかったとされている。早稲田に J・Sミルの翻訳のある天野為之、それに経済評論家、文明史家でもあった田口卯吉、福沢諭吉などがいたが、いづれも周知のように巾広く社会的に活躍した人達で経済学の専門の研究者ではなかった。

## 明治末から大正―経済学研究の第一次興隆期

わが国に、経済学者と呼ばれる人が出てくるのは、明治四十年代で、「社会経済学」(一九〇二年)を書いた金井延(東大)、「国民経済原論」(一九〇三年)を書いた福田徳三(東京高商、慶大)といった人達があげられる。

これらの人々は、ヨーロッパ、主としてドイツに留学した人達である。この人達が帰国し日本での経済学の研究が本格的に盛んになった最初の時期である。

この明治の終り頃から大正の初めにかけて、同志社で経済学を教えていたのは、水崎基一という先生であった。この先生についても、残念ながらあまり良く知られていない。わかっているのは、水崎基一先生は、経済原論の講義の他に、経済倫理という講義を担当しておられたということである。

この時期の日本は、社会主義運動が起こった頃で、マルクス経済学が入ってきた時期でもあった。大学の記録では、大正元年と六年の二回、わが国の初期のマルクス経済学者として高名な、河上肇(京大)が同志社で経済原論を講義している。

大正六年以降、大正十二年までは、河合嗣郎、中島重、山口正太郎、和田武、瀬谷佐次郎という先生方が、一年ないしは二年づつで担当しておられる。このことは、この時期には、同志社では理論経済学の専門家がいなかったと想像される。どうしてもこのような推論をするのかと言えば、この時期に同志社では、

大正八年から「政治学経済学論叢」を発行し、大正九年から「同志社論叢」という専門学術雑誌を定期的に刊行している。したがって、この雑誌に書かれた論文を見れば、大体の判断はできる。

## 昭和の初期―経済学研究の第二次興隆期

この時期には、高田保馬著「経済学新講」全五巻(一九二九―三二)、中山伊知郎著「純粹経済学」(一九三二)が出た。これらはいづれもイギリスのアルフレッド・マーシャルの影響を受けたものである。また、小泉信三著「経済原論」(一九三二)も出版されている。

同志社では、近代経済学の立場で経済原論を講義されたのが、古屋美貞先生で大正十三年から昭和十年まで講義を担当された。また全く同じ時期に、マルクス経済学の立場で経済学原論を教えられたのが、林要先生であった。このお二人は、理論経済学の専門家で、古屋先生は、限界効用に関するいくつもの論文を発表しておられる。

昭和十一年から十五年までは、京大の高田保馬先生と北野熊喜男先生が担当されている。この後、昭和十六年から十八年までは、柴田敬先生(京大)と中島哲人先生が担当された。昭和十九年以降は、戦争が激しくなり、経済原論の講義が行なわれたかどうか不明である。

### 戦後の新制大学における経済原論の講義

経済学の研究としては、ケインズ経済学とその発展としての経済成長論が大勢を占めるようになる。同志社大学での経済原論の講義としては、中島哲人先生が昭和五十六年まで担当された。これは同志社の経済原論の担当者としては、最長不倒距離ともいべき年数で、約四十年の長きに渉るものである。

中島先生は、シュンペーターの弟子のシュナイダー (Enich Schneider) という、ドイツにおける近代経済学の中心的人物の研究に没頭しておられた。したがって、この時期に同志社で理論経済学を勉強した人にとっては、シュナイダーという名前は耳に付いてはなれない非常に懐かしいものとなっている。

昭和三十七年からは、経済成長論の研究を主としてやられてきた、渡辺弘先生が原論Ⅰを担当され、中島先生が原論Ⅱを担当されるという体制が、学園紛争の時代まで続いた。ただし昭和二十八年―三十二年まで、中島先生が病気であった期間については、シュンペーターの研究家である、吉田昇三先生(和歌山大)が担当された。

### 学園紛争から現在まで

学園紛争後のカリキュラム改訂で、経済原論は近代経済学とマルクス経済学の二種類の講義が行なわれるようになった。そ

して学生に、どちらかで原論ⅠとⅡの講義を取ることが必修として要求された。もちろん両方にわたって勉強する学生も多かった。

その後、一・二回生は主として一般教育科目を勉強し、三・四回生は専門科目を勉強するという、戦後の新制大学の基本的な枠組がこわれた。経済学部では、昭和六十三年より経済原論という名称もなくなった。そしてミクロ経済学、マクロ経済学という講義が、一回生から取ることが出来るようになった。

さらに進んで理論経済学を勉強したい学生のためには、ミクロ経済理論、マクロ経済理論という講義が行なわれている。<sup>(注)</sup>

### むすびにかえて

過去百十五年に渉る、同志社での経済学に関する教育を、その基礎となる経済原論の講義を中心にまとめたいと考えた。しかし前述のように、あまりにも不明なことが多く、過去の経済学の教育を整理し、何らかの将来像を提示することは出来なかつた。

終わりにあたつて、興味ある結果を紹介したい。東洋経済がまとめた「役員四季報」についてのランキングを見れば、社長数についての出身大学ベスト五〇では、同志社は九位、役員数では十位である。<sup>(注)</sup>

良い経済学の教育が、実業界で活躍する卒業生の数に、直接に結びつくものではない。しかし、良い教育をすれば、社会で

役立つ人物が必ず数多く輩出すると信じなければ、教師として  
日常の教育ができないのも事実である。バブル経済の崩壊後に  
こそ、良心を手腕に運用する同志社人が活躍するであろうと期  
待される。

# 時代を超えた人々の大学

押 本 年 眞  
(商学部教授・宗教部長)

新島襄生誕一五〇年記念にあたり、同志社創立にこめられた  
理想をふりかえり、次の世紀にも意味を持つものは何か、又、  
現状のうち見直すべきものは何か、多少述べてみたい。

言うまでもなく同志社はキリスト教を基本とする学園である。  
それも、プロテスタンティズムの側に立つ私学である。

さて、同志社も加盟している組織のひとつに、キリスト教学  
校教育同盟がある(同盟の現理事長は松山義則総長・理事長であ  
る)。この教育同盟には、プロテスタントのキリスト教が創立の  
根本にかかわる、約百の学校法人が加盟しており、関西学院、

注1 この部分ならびに後の経済学研究の展開は、青山秀夫先生の

マージナル研究会での話にもとづく。

注2 以上で述べた、同志社での経済原論の講義の担当者名は、横

田守(学事課)と富山俊一(経済学部事務室)の二人に調べて  
頂いた。

注3 週刊東洋経済、一九九二年十月十七日号を参照されたい。

青山学院、立教、明治学院、東北学院、西南学院等、伝統があ  
り知名度の高い学校が名をたらねている。ひとつの学校法人は、  
大学以外に短期大学、高校、中等等を設置している例が多いの  
で、この同盟に属する学校数は、相当な数にのぼる。他方、カ  
トリシズムの側も、教育を重視し、キリスト教を創立の基本と  
した私学は多く、上智、南山等をはじめとして、小規模ながら  
独自の校風を維持し、独自の成果をあげているものまで、さま  
ざまに存在している。中には我が国独自の受験風土の中で、い  
わゆる有名大学進学に成果を挙げることで著名な高校もある。

このような観点からすると、キリスト教が建学の基本である私学が、現在の日本の初等、中等、高等教育の各段階で相当な役割を占め、社会的評価を得ていると言つてよい。

さて、このようなキリスト教を建学の基とする私学の中にあつて、同志社の特色とは何であらうか。この点について述べてみたい。きわだつた特徴は、同志社は新島襄という日本人によつて創立された点である。多くのキリスト教主義の学校は外国人宣教師によつて設立されたのに比べて、このことはやはり注目すべきことと思う。しかも、新島は幕藩体制崩壊の危機を深く感じる環境の中に育ち、やがて外国の文明に対してきわめて開かれた態度をとる人となつた後も、ナシヨナリスティックな面が非常に濃厚な人であつた。彼の漢詩や、書簡のよく引用される部分には、邦家、日本、天下といった言葉がみられる。同志社の関係者は、創立者を深く尊敬する人が多いが、時にはその関心がナシヨナリスティックな面に傾きすぎていると感ぜられることもある。このことは、新島のキリスト教的、内省的な側面は、同志社関係者であつても近づき難く感じられがちなのに対し、ナシヨナリスティックな面には共感しやすいという事情があると言えよう。

しかし、新島襄を愛国者ととらえることは、彼が使う邦家とか一国という表現は何を意味しているのか、また彼のキリスト教信仰と如何に結びついていたかを把握しないかぎり、きわめて片寄つた解釈とならう。新島襄のナシヨナリスティックな面は、偏狭な国粋主義に陥るべきものでなく、むしろ今日より二

十一世紀にいたる日本人と他の国々との関係に示唆を与えるものと思うからである。

さて、同志社大学設立の旨意をはじめ、新島の表現に繰り返し使われる、一国、我邦、邦家等の表現は、決して統治機構としての国家体制を意味しているのではない。それらは常に近代国家としてスタートした日本の中で日々の生活を営んでいる人々の総体を指していると言つて過言でないだろう。このような解釈を支えてくれるものとして、最近読んだものの中では、『同志社叢書』第十号に寄せられた竹中正男先生の「新島襄晩年のこころ」と題する論文がある。この論文は、有名な「畢生の目的」を中心に論じられているが、竹中教授は勝海舟が揮毫した新島の愛誦の句を、新島襄を尊敬していたアメリカン・ボードの宣教師A・L・ハウスの英訳をあげて、「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」の訳と解釈しておられる。その訳によると、国家に相当する部分は *civil nation* と訳されている。これは、新島の真意、心情にそつた訳と言えよう。国家ということ、とかく *state* を連想しがちだが、一定の領土内で一政府のもとに組織された政治的集合体、およびその政治権力」の意をもつ *state* よりも、特定の制度、習慣、文化を共有する複数の人々を含みとして持つ *nation*こそ、この場合にふさわしい。

国家という語についてささそうでなるならば、新島襄が国を想う人であつたという場合、それは時の権力、明治政府でないことは明らかであろう。新島もまた時代の子として、若き日の漢詩には忠義の語があつたり、維新後の政治の中心となつた天

皇にたいして配慮した表現もみられる。しかし、彼の眼には薩長土肥を中心とした藩閥、門閥政治は常に批判すべき対象として映っていた。「大学設立の旨意」等には、近く開設される国会に対する並々ならぬ関心が表明されている。新島は、明治の日本が次第に国家主義的傾向をおびてくることを憂慮しつつも、やがて開かれる国会の場に於て、「智識あり、品行あり、自から立ち、自から治むるの人民」が、闊達、活発に論議を重ねることにより政治が行われる状態を強く期待し、「苟も」そのような「立憲政体を百年に維持せんと欲せば」、「国家百年の大計」である教育、とりわけ「此の大学を設立する」(『新島襄全集』一巻、一四〇—一四一頁)が必要であると判断し、大事業に取り組んだのである。

ついでながら、「設立の旨意」には、「人民」という言葉が繰り返されるが、これは英語のピープル (people) に相当させる意味で用いられていると思う。一時期、この人民という語に特定のイデオロギー的合意をもたせて解釈するむきもあつたようだが、それは必ずしもあたらないう。ただ、新島は滯米生活が長く、青年期の教育をそこで受けたため、力強い日本語の文章で論を展開している時も、そのキー・ワードは、英語との関連でとらえることが有効のように思われることを述べておきたい。ともあれ、人民⇓ピープルととらえると、民権重視で平民主義的であることは、たしかである。同志社は、創立者が、人々の学校であることを念願して生まれたものである。

新島が「国家万歳」という表現を用いても、それは国粋主義

や国家最優先の教育を志向していたのではないことをよく示す例として、端的に彼の愛国についての文を引用したい。

愛国ハ乃己(己)名利不顧、己一身ヲ抛テ、国ノ為人ノ為ニ計ル也。愛国ト申セトモ、ツマリ愛人、日本ノ愛国ハ偏顧ノ所アリ、(中略)愛ハ人ヲ憎マス、人ヲ克容ル、人ノ為己ヲモ棄ツ

新島が、邦家といった言葉を使う時、それは日本の国土の中に、日々、具体的に生きている人々のことを想っていたことが、明瞭であろう。

幼少の頃、彼自身の生活をも窮屈に束縛する強い力を持っていた幕藩体制がやがて滯米中に崩壊した時代を生き、欧米諸国を広く見聞し、ニュー・イングランドのデモクラティックな風土の中で人格形成に重要な歳月を過ごした新島襄にとつて、次第に強固になつてゆきつあつた明治政府も相対化してとらえられていたと考えられる。かつて、『聯邦志略』を読んで、主権在民の民主性にもとづく大統領制などを知り、「頭から脳髓がとろけ出るほど驚いた」(『Life and Letters』三—四頁)経験は、彼の中に生きていた。

さらに、国を愛することは人々を愛することと新島に言わしめたものは、キリスト教の信仰である。時の国家権力は強大と見えても、広い視野で見れば、比較的短期間のうちに、栄枯盛衰すると彼がとらえたのは、それを越えるものを信じたからで

ある。

昨今、国際化、国際交流といった言葉が、しきりに使われる。確かに、現代では何事もグローバルな規模でとらえなければならぬ。しかし、「国際化」という言葉は、日本が一方的に国益追求を考慮している文脈で使われる側が、ままある。国と国との交流といつても、究極的には、人々と人々が相互理解し、協力するような国際主義こそが真に目指すべきものであろう。近年、地球上のかなりの範囲で、不変かにさえ思えた国境が流動し、変化する現象があつた。その過程をとおして改めて、国家だけでなく、具体的に生きている人々、民族に目を剝ける必要性が、一層、痛感されている。

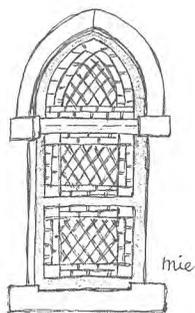
かくして、新島襄のナシヨナリステイックな要素の考察は、同志社の目ざすべき、今後、ますます意味を持つ国際主義の教育・学術交流の方向の示唆へ導くこととなる。

さて、新島襄に崇高な建学の理念を与えたキリスト教についてふれておきたい。今日、日本には一種の宗教ブームがあるが、全体としては非常に世俗化した時代であり、若い学生にキリスト教を、直接、教え広めることは、実に困難である。しかし、現時点でふさわしいさまざまな方策により、建学の精神を伝え、キリスト教にふれさせることが必要である。少なくとも、異文化に接する際に、「独り其外形物質上の文明を模倣」（大学設立の旨意）より、表面的な理解にとどまるのではなく、その文化を内側から支えている価値は何かに目をむける人物を育てたいものである。このこともまた、真の国際主義へつらなるも

のと思う。

同志社は単なるミッション・スクールでないため、キリスト教主義が希薄化する危険もある。しかし、諸々の学問が一国の文明・文化の質にかかわるほどの内容を持つ教育・研究が行われる大学であつて、かつキリスト教をその根幹におこうとした創立者の理念の中に、困難ではあつても、進んでゆく鍵があると考えよう。

最後に、新島襄の理念の継承の重要性に関連して、貴重な資料の良い条件での保存と、公開に、学園全体が留意することが肝要とつけ加えておきたい。



# 独自一己・自治自立・倜儻不羈

百合野 正 博

(大学商学部助教)

私の生まれ育ったのが新町キャンパスから北へ歩いて数分のところだったために、近過ぎるということもあり、正直言つて、同志社大学に通うのはあまり気が進まなかつた。両親も、その当時は学費に相当な格差のあつた国立大学に行つて欲しかつただろうと思うが、ただ一人、母方の祖母だけは「同志社はホンマにええ学校や」と言つて、同志社に合格したことを本人以上に喜んでくれていた。そして、祖母の言うことが正しいかどうか半信半疑のまま入学して間もなく、私はすっかり同志社員になつていたのである。

では、どこが気に入つたのだろうか。赤煉瓦の建物群の醸し出すアカデミックな雰囲気は、確かに大学で学んでいるという気分を満足させてくれた。しかし、私が入学した一九六九年の夏休み前には、全学バリケード封鎖のためにその大学らしい雰囲気は今出川キャンパスは「解体」されてしまつた。だから、クラブの例会が行われた別館、今出川近辺の雀荘、そして裏寺

あたりの居酒屋などに点在した「もう一つのキャンパス」を樂ぐ「何か目に見えないもの」が好きになつたと言つた方が適切だろう。そして、その当時はただ漠然と好きだと感じた同志社の自由な雰囲気の原因が、いささか陳腐化した言い方を借りれば「新島精神」(もつと正確に言えば「新島襄の怨念」)であり、さらに、その具体的な中身として、学生時代の私がいささか「良心」にとられすぎていたのではないかと感じたのは、同志社在外研究員として二度目のイギリス暮らしをしているときだつた。

約二年間のイギリス生活は実に快適だつた。それは、毎週金曜日の昼休みになると大学のワイン蔵が置いてワイン談義に花を咲かせながらたつぷりと聞き酒ができたことや、多少見えにくいことさえ我慢すれば毎晩でも五百円以下で一級のコンサートが聞けたことや、百年以上も前に発行されたにもかかわらず、非常にコンディションの良い切手が簡単に入手できたことなど

も影響しているかもしれない。しかし、実はそれら以上に、イギリス人が自治自立していて、イギリス社会が「上意下達の社会構造ではない」ことを目の当たりにし、そういう社会が非常に住みやすいことを体験するとともに、そういう国でこそ会計や監査が発達するという私の年来の仮説が実地検証できたのが快かつたのである。(反面、そのような社会基盤のない日本のことを考えると暗澹たる気分になったが…)。

実際、イギリスでは他人の目などにせずに、自信を持って我が道を行くことができる。ある日突然、一斉に冬服から夏服に「衣替え」するのではなく、革ジャンに手袋の人とTシャツ一枚の人が並んで道を歩いているし、高校にイヤイヤ進学した後で大量に中退するのではなく、いったん社会に出て何年もたつてから大学で勉強する人も少なくない。ホテルで派手な結婚披露宴をするカップルなんて聞いたことがないし、下戸だからといって酒席で肩身の狭い思いをすることもない。イギリスには「付和雷同」という言葉は存在しないかのようなのである。他人は他人、自分は自分。実に住みやすい。

こういう国民を上からコントロールすることが至難の技であるろうということは、すぐに想像がつく。種々雑多な個性を持つ国民に号令をかけて、ピラミッド型の組織作り上げ、それを思うがままに動かすことなど、ほとんど不可能に近い。実際、イギリスはそういう社会ではない。しかし、私がこう言っても、奇異に感ずる方がおられるかもしれない。というのは、わが国では、日本は階級社会ではないがイギリスは階級社会だとい

固定観念がまかり通っているからである。階級社会というのは、社会全体がぎつちりとピラミッド型に組織されているはずではないか、と。

確かに、イギリスには女王が君臨しているし、貴族もいる。身近なところでも、私の住んでいた大学寮の食堂の一番高いところには「ハイ・テーブル」と呼ばれる特別のテーブルがあつて、先生たちは学生を見下ろしながらそこで食事をとる。なるほど、イギリスには階級がある。一方、日本はと言えば、象徴としての皇室はあつても貴族はいないし、日本人のかんりの部分で自分は中流の上に位置すると信じている。おまけに、日本の大学教授は地下の学食で学生と同じテーブルについてラーメンをすすっているではないか。(まさか、我が同志社だけでは?)なるほど、日本は階級社会ではなさそうだ。

しかし、イギリスに住んでいるうちに、これをそのまま鵜呑みにしてよいのだろうかと素朴な疑問を感ずるようになった。実際、私の回りには、イギリスに来て初めて、日本が上下関係の非常に複雑な社会だということに気づいた人たちが何人もいた。テレビを見ていても、イギリスでは、政治家や企業経営者が国民の「代理人」であるという自分たちの立場を十分に理解していて、視聴者(「国民」という「主人」)に自分たちの行っている事柄について詳しく説明することを非常に重要視していることがわかる。ふだん、木で鼻をくくつたような答弁をする政治家や株主総会を数分で終えたいと願っている企業経営者を見慣れている我々には、とても彼らが同業者とは思えない。一

方の国民も、権力者を笑い飛ばすことによつて、彼らにはなく自分たちに主権のあることをはつきりと示している。『スピッツィング・イメージ』に代表されるその種の風刺番組で王室や首相がコケにされているのを見ても、最初のうちは笑うどころか、よくまあプロデューサーが刺されないものだトマジになったものだ。やがて、イギリスの政治家や企業経営者が国民に説明することを重要視するのは、彼らがそうせざるをえないほど強く、国民自身が、自分たちこそが政治家や企業経営者に説明させる対象であるということを意識するとともに、それを明白に態度で示しているからに他ならないということに気がついたのである。パブリック・セクター（公共部門）を動かしている人よりもプライベート・セクター（民間部門）で生きている人の方にパワーがあるのだ。

そのような国から日本を見ると、日本も自由な民主主義の国で、完全な平等社会であると信じられているけれども、実際は一人一人の間に細かい上下関係が成立しているけれども、実際は大きなピラミッドを構築しているのがわかる。しかも、主権在民の意識の強いイギリス人とは対照的に、日本人は何事もそのピラミッドの「上の人」まかせ。政治が悪い、企業が悪い、などと文句は言うけれども、自主的に考え、進んで意見を言い、自らの責任で行動しようとする人は多くない。そんな無責任な国民だからこそ、政治家は国民の意思を無視することができ、依然として「官尊民卑」の意識もなくなるのである。

私はイギリスに持参していた『同志社大学設立の旨意』を読

み、はたと思い当たった。新島先生がどうしても私立大学を作らなければならぬと切実に思われたのは、アメリカで民衆のパワーに接した先生がこの日本人の欠陥を痛感されたからに他ならないのである。しかも、自由の国のアメリカ人には備わっているけれども、封建社会と鎖国が長く続いたゆえに百年前の日本人には欠けていた資質を「私立」大学教育によつて補わなければならないと先生は考えられたが、驚いたことに、民主主義国家になるとともに国際化が進んでいると一般には思われている今日の日本社会でも、その問題点は全くと言ってよいほど解消していない。つまり、新島先生のこの考え方は現在でも決して色あせてはいないのである。

そして、私がただ漠然と好きだと感じた同志社の自由な雰囲気の中に、実は、『同志社大学設立の旨意』の中で「其生徒の独自一己の気性を發揮し、自治自立の人民を養成する」ことが私立大学の特性の長所であると述べるとともに、死に臨んでさら「同志社ニ於てハ個體不羈なる書生ヲ圧束せず」と言い遺された新島先生の基本的な考え方（怨念）が生き続けていたのだということにも思い及んだ。日本に戻った私は、早速、コレクションの中の「下野国下都賀郡山田村 白石藤造殿」宛の封筒から『同志社大学設立の旨意』を取り出して、もう一度最初から読み始めたのである。

# 雑感—同志社の現状・展望

雨谷昭弘

(大学工学部教授)

## 一・まえがき

新島襄生誕百五十年、立ち止まってみれば時の流れの速さに、そして時代の変遷の激しさに、生きている人間は右往左往するばかり。ここ数年を振り返っても大学制度の大変革—専修学校・一般研究機関での学士・修士の認定、一般教育・語学課目等の必須・選択自由化、大学院大学・自己評価制度等々—に戸惑い慌てるばかりである。同志社に限っても田辺校地開設、工学部移転、新学部・学科の設立予定等目まぐるしく変化して行く。

ある年数以上生き、また一つ所に居着いてしまうと時間・空間を超えてものを見ることが難しくなるのかもしれない。敢えて新島襄の教育理念を思い起こし乍ら同志社の現状と将来を展望すると、実像と虚像が交錯し、夢を語ると論理に矛盾を来た

し言葉に詰まる。とすれば思いつくまま気づくまま書き連ねるより他に手がない。

## 二・現状または問題

個人・組織を問わず現状には必ず問題があり、それぞれに不満を抱き、現実的な改革を目指し、あるいは将来に夢を託すのは当然のことであろう。同志社大学の現状から派生する問題点を学生等の意見を含め列記してみる。

### (一) 学生関連

(イ) クラブ活動低下、サークル・クラス内小グループ大繁盛—  
二回生の田辺校地移転に伴なう三・四回生との分断、田辺校地では教室以外に行くところがない、高尚な趣味を分かち持つ同志が徒党を組んで同志社の丘を降り巷に出る程の気迫もない等々。独り淋しくアパートで夢想する、教室で居眠りするある

いは漫画文化に熱中するよりはまだサークル・グループ化の方が良いかとも思うが。一・二／三・四回生分断により二年間促成栽培の小さな父ちゃん風の増加、自主独立の風化、付和雷同、安逸を貪る風潮等問題であろう。

- (ロ) 学生の質の変化(低下?)—授業への出席率倍増は一見真面目学生の増加(学生の真面目化)と見受けられるが、田辺キャンパスでは他に行くべき所がないと言う実態が裏に見えて来る。積極的に講義に出席し真剣に受講する感覚は希薄で隣りの友人へのお付合程度の中途半端さが目につく。所謂成績(平均点)は大幅に上昇したが実力には疑問符が付く。文化・技術の目覚しすぎる変遷に対応する半期コマ切れ講義の増加(反省)、採点が全般に甘くなった(反省)、一夜演技術・複写技術・単位取得長期作戦の奏功等々によるだけではないかと思える。
- (イ) 基礎的課目減少・応用関連課目増加—広く浅くで良いが基礎の実力が身につかないとの成績優秀学生の意見。
- (ニ) 教科書棒読・音声不明・テープレコーダ式等の講義、官僚的事務窓口等、学生を物(商品)としてしか見てないような側面があるが、「教職員は学生を鄭重に取り扱う可し」とか「五平事件」に見られる教職員の自己批判等、新島襄の理念はもはや過去の遺物か。との怖い学生の意見(冷汗、反省)。
- (ハ) 工学部移転後田辺校地は活性化するか?
- (ヘ) 田辺校地における都市機能の欠如—夕刻からの田辺校地過疎化問題、食堂不足等。
- (ト) 興戸・三山木から同志社山頂までの交通手段および近鉄新田

辺—興戸・三山木不連絡、急行停車。

(イ)、(ハ)はいずれも田辺校地に関連した学生の意見であるが、特に(イ)、(ハ)は周知の如く切実な問題である。工学部田辺移転は対策を講ずる絶好の機会と思われるが。

(ロ) 大学院講義の細分化・専門化、コマ切れ講義で理解困難—成績優秀院生の意見であった。

(リ) 大学院生数の大幅増に対応不十分。

以上二項は担当者の一人として検討の必要性を感じている。

(二) 大学組織・運営

(ウ) 学長任期三年の妥当性—長期展望により改革を行なうとすれば短かくはないか、逆に長期政権になれば独裁・腐敗の恐れもあるが。

(ロ) 職員の学長選挙権の必要性—管理職養成上問題があるように見受けられる。学長の管理職任命権の廃止、逆に職員の学長選挙権の廃止あるいは管理職養成手段等検討の余地有りと考えるのは筆者だけでしようか。

(ハ) 職員と教員の相互理解の不十分さ—異なる職務に対する最低限の情報交換、異なる立場からの問題提起・相互批判等の場が欠けているように見受けられる。

(ニ) 会議・委員会等の有り方、重要事項の提案時期・審議期間等に疑問を感じることがある。

(三) 全大学共通の問題

(ウ) 大学進学予定者の漸減—出生率の低下に伴い若年層人口は漸減しており十年後には現在よりも三十%程度減少する。これに

対して長期的にどのような対処するのか。大学のサブイバルゲームは既に始まったとして行動を起こしている大学もあるが。(三)大学制度の変革—前項および地方国立大学の長期低落傾向、社会情勢の変化等に対応した大学制度の大幅な変革は私立大学にとって両刃の剣となり得る恐れがある。

### 三．展望

同志社設立の趣旨、その背景にある新島襄の教育理念はかなり普遍的で時代の変遷にも未だ十分に対応し得るものと理解される。この意味で同志社は幸せである。しかし、現実の問題に對して理念は何とでも解釈できる要素を持つので、精々自己弁護程度の意味しかないと思われる。

先に列挙した事項のいくつかは単に経済性の問題として、また教職員の努力の問題として解決できるのではあるまいか。もしも新島襄の教育理念、例えば「同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事するに係らず皆精神活力あり真誠の自由を愛し以て邦家に尽す可き人物を養成するを務む可き事」、「社員たるものは生徒を鄭重に取扱う可き事」、「同志社に於ては個儻不羈なる書生を圧束せず務めて其の本性に従い之を順導し以て天下の人物を養成す可き事」、「同志社は隆なるに従ひ機械的に流るるの恐れあり切に之を戒慎すべき事」等が同志社の厳然たる指針であり、かつ教職員共通の了解事項であるならば、実現可能な夢を列記してみよう。

(a)興戸から校内迄サンフランシスコの電車を走らす(同様の趣旨を新聞でも目にした)。経費は卒業生、在學生、受験予定者および関係者等の寄付—但し一年間フリーパスと交換でマスコミを通じたキャンペーンを打てば本学のコマージュにもなる。当然乍ら駅ビルには喫茶、レストラン、ゲームセンター、ブティック等の都市機能を持たせる。

(b)工学部移転時に建設する食堂棟も都市機能を持ったものとし、例えば植物園、温水プール等と共通施設とする。その設計を全国キャンペーンで募集する。これは(a)項および受験生募集を併せて行なう。京都駅の広告よりはよほどインパクトが大と予想される。

(c)夢であつてはならない話として、先の(カ)、(三)項を考慮した同志社大学の長期方針を検討する委員会を設置が必要であろう。その中で(イ)、(イ)項等の対策も検討すべきであろう。これは新島襄の教育理念云々以前の大学の本質的課題であると考えられる。検討の中で新島襄の理念が生かされて来るものと期待する。

# 未来に向つて思うままに

小林 眞 造

(工学工学部教授)

これまでの科学技術は、人間の生活を豊かにするための方法や合理化に重点を置いて発達してきた。しかし二十一世紀に向けて、科学技術には新しい考え方、方向性が求められていることは確かである。どのような点で今後の技術は変わっていくのかを考えてみたい。

方向性としてはいくつかの大きな流れがあるが、代表的なもの、二に焦点を合せてみたい。まず第一に挙げられるのは、従来のコンピュータとは性能が異なるコンピュータを作り出すという動きである。これまでのコンピュータの機能は、記憶する、計算する、物体の動きを制御するなどである。そして、人間が予め考えたプログラムに従つて作動する。しかしこれでは人間の創造的な仕事の応援をするとはほとんど不可能であるということから、「思考する機械」、つまり「知識的な処理をしてくれるコンピュータ」を目指す研究が生れ始めているのである。そしてこのコンピュータには考えることはもち

ろん、喜ぶ、怒るなど、あくまで我々人間が日頃行っている知覚や感覚に近い機能を持たせようというのである。人間に近い頭脳を持たせるためには、我々が日常経験しているような大きな直感というか、ややいい加減な判断を下すような機械にすることも必要である。たとえば、ある美しい景色の前に立つ時、我々はそれをボンヤリと眺める。そしていくつかのポイントでその景色の特徴を記憶するというようなことを経験する。その特徴の捉え方には公式というものはなく、人によって異なるという「あいまいさ」がある。人間のように対象物を感覚的に認識することができるならば、柔軟な判断能力を持つ機械の実現も夢ではない。

人間同士がお互いに理解し合うためには、常識や物事の判断基準がある程度共通していることが望ましいように、機械と人間とが同じようなレベルの知識を共通できるようにすれば、人間が行う筈の創造的な仕事を機械が分担してくれることも可能

になるであろう。このような人間の脳に近い思考する機械の実現を目指すためには、まず人間の脳の働きとそのメカニズムとを知る必要がある。

例えばつぎのようなことが考えられる。動物の脳の神経細胞は、一個一個がメモリー機能を持つコンピュータである。この小さなコンピュータがどのように働いているかを知ることが必要である。その手段として、細胞から細胞へ伝わる電気的な信号を促えるための装置を作るといような作業が研究の第一歩となる。この種の研究には、脳神経系の働きの解明という生理学、医学系の仕事と、これをモデル化した回路を作るといような物理、工学系の仕事の連繫プレーが必要である。

もう一つ考えられる科学技術の方向は、工学的な技術の生命科学や医学への応用である。例えば将来人間の寿命を延ばすための研究が一段と進むと思われるが、その中に人工臓器や人工関節の開発がある。例えば、小さな生物の心臓の構造を模倣して、小型化した精密な人工心臓を人体に埋め込むといようなことが考えられている。また、これまでのロボットは工場での組立作業や品物の運搬に用いられてきたが、将来は超微小なロボットが開発されるといわれる。それが人体内に送り込まれて病巣部の手術を施すとか、血栓を取り除く、ガン発生部に制ガン剤を届けるなどの作業をするのもそう遠くないといわれている。以上述べたような先端科学技術を目指すには、少なくともつぎに記すような二つのことが重要なポイントになると考ええる。一つは、これからの技術開発においては「人間中心に考え

る」という思想がなくてはならないことである。これまでの技術開発の過程では、我々は「人間の立場」ということを疎かにしてきたように思われる。開発された技術は人の役に立たなければならぬ筈なのに、現実には必ずしもそうでないことが多くある。例えばパソコンやワープロの中には使いこなしが難しく、使用者の立場を考えた設計になっていないものが多い。あるいはまた産業廃棄物がたまって環境破壊を招いているということもある。物を作る技術レベルが高くて、作ったものを使ったあとの結果がどのようなようになるかということについてのノウハウが十分でなかったといえる。したがって未来を支える科学技術を考える時に、「いかに人間の立場を考えていくか」が大切な要素となるであろう。

もう一つ重要なことは、今後は研究が個々に分断されていては十分な成果を發揮できないということである。コンピュータにしてもロボットにしても、工学、医学、物理学などさまざまな分野の人達が集まってこそ実現が可能である。つまり研究は個人単位からチームプレーへと総合化される形で変化していくであろう。そこで非常に大切なのは、人と人との協調とコミュニケーションである。研究を進める上で人間同士の和の精神が重要な意味を持つことになると思われる。

以上将来の科学技術の発展の方向の一端を記したが、同志社大学の工学部は今後どのような歩みをなすのであろうか。一九九四年四月の田辺移転を機に、知識工学科の新設が計画されている。この学科では思考するコンピュータやロボットが研究

対象になるであろう。化学系は機能分子工学科と物質化学工学科に、機械系は機械システム工学科とエネルギー機械工学科にそれぞれ名称を変更する。いずれ工学科はこれらの名前に相応して教育、研究内容が充実し、先に記したような先端科学に拘わりを持ちながら時代の要求に添えていくに違いない。そのためには、これまでの個人単位の研究体制に加えて、異なった研究分野間の総合協力体制を目指すことが望まれる。

新島襄はことのほか「すべての人と和をもって生きる姿勢」を貫き通した人であった。さらに精神の強い情熱の人であった。内面には常に激しい火が燃えており、山々を震わせるような気概があったと伝えられている。今一度我々が新島のこのような姿勢や性格を顧みることが、同志社の発展を期する上で大切なことではないだろうか。

新島は明治十六年（一八八三）の初頭に医学校設立について大村達斎、中村栄助らと協議していた。結局これは不調に終わったが、その三年後にデイヴィス邸に同志社病院の仮診療所を開いて、京都看護婦学校の授業を開始している。その翌年の一八八七年十一月には同志社病院の開院式が行われている。

また一方新島は天文学や地質学を含む理科学学校の設立を志し、一八八九年にハリス氏よりそのための資金として十万ドルの寄付申込みを受けている。新島は同志社の卒業生が社会の要求に添えて活躍できるようにとの願いから、さまざまな分野の学科を設立しておきたいという志を抱いていたことが伺える。しかし志の実現を見る前に病に倒れてしまった。

先に科学技術の一つの流れとして、将来、工学と医学との協力体制が必要であることを述べたが、このような要求に添える形で、いずれどこかの大学で「医工学部」というのが生れるに違いないと私は思っている。同志社には医学部はない。医学部の設置は資金面、運営面でなかなか難しい。しかし創設者新島襄が、医学校と理科学学校の設立に熱意を注ぎながら、その志を実現できなかった気持ちを知るとき、せめて工学と医学とが連繫して研究を進める「医工学部」が、全国の、いや世界の大学に先がけてこの同志社に設置されるならば、それは、まさに新島の志を継ぐ偉大な事業ではないだろうか。



# 同志社の現状と将来像

奥田 聡

(大学工学部教授)

一九九三年二月十二日に新島襄生誕百五十年を迎え、創立百十七周年になる同志社の現状と将来像についての寄稿を求められたので、平素考えていることを述べ、その責を果したい。

## 同志社の気風とその再興

同志社の心を一口でいえば、新島の先生の遺された「良心」の一言であるといえる。これを英語でいうと、「Conscience」であり、Science (科学) に合致することである。無理のない自然な大道(真理)に従うのが科学の道であり、自然の理に従った合理的な考え方をするのが科学であるということである。明治以来、日本は近代化したのが、未だに非合理的な考え方が多く、非科学的なことの方が偉いのだという誤った考え方が残っている。科学者新島襄の先見の明に頭が下るばかりである。西独フライブルグ大学の壁に「真理は汝を自由ならしめる」(Die

Wahrheit wird evch Freimachen) という言葉が記されているが、真理への愛、自由への愛、が学問の根本をなすもので、大学設立の理想もそこにあるべきである。自由は放縦ではなく、自分自身で自己を制御することである。自分で制御できなくなると他人から制御されることになり、大学の自治も学問の自由もなくなってしまう。一八八四年スイスからドイツへ旅された新島先生は途上あるいはフライブルグ大学の壁の文字を見られたのではないかと想像される。同志社大学今出川校地明徳館および田辺校地知真館の壁に「VERITAS LIBERABIT VOS」と同じ意味の言葉がある。

一九六二年同志社に着任した筆者は学内にみなぎる明るい自由の気風を感じ、心暖まる気持ちがあった。同じ頃同志社を訪ねて外から人が来られたことがあるが、私の室が分らず、数回学内で道を探ねてやっと私の室にたどり着かれた。しかし途中で応対した学生はじめ社内の人々の態度が紳士的で、全くその対

応に感心していた。当時の学内には暖かい気風が流れ、強制ではなくとも、ひとりで身についたマナーが学生間に見られた。また教職員の間にも互いに支え合っていく互助の心が見られた。これらのことは国立大学の教授をしていた筆者には予想もしなかったことで、良心の府としての実感を持ったものである。ところが一九七二年頃の学園紛争を境にして学内の気風は一変し、学園紛争の後遺症は今に至るまで回復していない状態である。かつてのよい気風は無くなり、官僚的国立大学と変わらぬ気風が横溢していることはどうしたことであろう。良心の充実した同志社の気風が再興することを先ず祈願するものである。

### 教学とくに大学院の充実

国立大学に比べて私立大学には、それぞれの大学の伝統と校風が未だ残っていて、近年研究においても、私学独自のユニークな研究が目立つことは心強いことである。こじんまりしていても特徴のある研究が私学の研究の特長であり、今後ともますますこの面を強調していく必要がある。と同時に研究の高度化について大学の存立ををかけて努力していく必要がある。研究の高度化は当然大学院の充実によって達成されるものと思う。文部省は大学院大学の設置に熱心であるが、私学では必ずしもそのような制度に従う必要はなく、大学院と学部相互の円満な発達が望ましいのではないかと考えられる。

さらにポスト・ドクター制の設置と充実が研究の高度化には

ぜひ必要である。研究者として博士号を所有して間もない期間の研究が最も稔り多いものである。戦後、日本のポスト・ドクターの若い研究者がフルブライト制度やフンボルト基金によって大勢米国や西ドイツに渡り、彼地の学術水準を大いに高めるのに貢献したのを考えると、ポスト・ドクターの活用こそ、学術レベルを引き上げる最も速い道であり、国内のポスト・ドクターの研究が容易く定着できるスペースを造ると同時に外国からもポスト・ドクターあるいはドクターコースの研究者が押し寄せてくるようになってはじめて世界に通用する大学といえるのではなからうか。学部レベルの留学生を受け入れるのも国際交流の上では必要であるが、研究の高度化には何ら役立たず、大学院とくに博士課程後期以後の充実が重要である。

つぎに私学としてのユニークな研究領域が固まったならば、研究センターとしてさらに発展させることが望ましい。研究所でもよいが、研究所を維持するには相当の経費を要し、またその研究所が相当の成果を挙げる保証は必ずしもない。それに対して研究センターは比較的狭い研究分野について内外にアツピールし、研究センター的活動を行うもので、極めて活性にとんだ研究活動を行うもので、最近、海外でも設立が続いている。研究所また研究センターの予算には委託研究制度を拡大、利用することが考えられるが、さらに研究プロジェクトをいくつか用意し、全世界にその課題をアツピールし、研究資金の口数での提供を訴えればよい。また研究プロジェクトの設定・運営にあたっては文系と理系の協力・融合が望ましい。

## 科学技術分野での国際交流

科学技術には国境がなく、国際的分業によりそれぞれの分野を分担するとともに、国際的な刺激を受けることよって科学技術は大きく発達する。現今、日本での開発はほとんど応用・製品化技術であるが、基礎研究の面では、欧米諸国が永年におたり、巨費と人材を投じて得た基礎研究の成果を、チャッカリ頂いて、それをもとにして開発した製品を逆輸出している。このような基礎研究のわが国の遅れは最近指摘されることが多いが、一方日本の研究開発体制が閉鎖的であることの批判も強まっている。他の国につきつぎに研究員を派遣し、研究成果を持ち帰っているのに対して、日本への研究機関への外国人の参加はきわめて少ない。世界に通用する基礎研究を進めるには、その前提として日本の研究体制そのものを国際的に開かれたものにする必要がある。最近の科学研究では一人の天才だけに頼るのではなく、異質の頭脳を集め、多角的な研究を進めてはじめて新しい成果を生み出すことができることが多い。若い研究者は研究テーマの面白さに集まるもので、外国から日本の大学、研究機関に研究者が押し寄せてくるようになってはじめて日本も世界に通用する国になるのではないだろうか。大学の旧い形式主義・権威主義の体制の中では、若い研究者が自由に思い切った研究をすることができないこと、日本には魅力的に研究指導者が少なく、外国の後追いの研究が多く、真に独創的研究が

育っていないこと。などの問題が多い。以上、研究面の国際化にあたっての諸問題を述べたが、最も重要なことは、我々自身がオリジナリテイに富んだものを持ち、それを通して世界の文化に貢献することである。

## むすび

本年三月定年を迎える筆者が敢て愚見を述べたが、教育面では同志社精神に則った教育をさらに強く押し進めること。研究面では骨身を削るような努力と独創性が研究の本質であること。を訴えて、同志社の二十一世紀へのさらなる発展を祈念するものである。



# 自然との対話を愛した新島襄

末光力作

(大学工学部教授)

庭上一寒梅  
笑侵風雪開  
不爭又不力  
自占百花魁

よく知られた新島襄作の五言絶句である。筆者はこの詩を読むとき、旧約の預言者エレミヤのことが頭に浮ぶ。エルサレムの北東六キロのところにあつた寒村アナトテの一青年エレミヤは、春なお浅い或る日野原でアーモンドが可憐な花をつけているのを見た。アーモンドは眼覚の木と呼ばれ、日本で言えば丁度梅の木に当る。冬枯れの寒々とした野原で万物に先がけて咲くアーモンドの花を見て、青年エレミヤは冬枯れの中になお、眼覚めてい給う神の言葉を聞いて、預言者とした起つ決意をしたと聖書は伝えている。(エレミヤ書一章十一節)預言者は詩人であり、詩人は預言者であるという。新島がこの詩を作ったとき、彼の心にはエレミヤが宿っていたのではあるまいか。

新島は自然を愛した人であつた。いや、自然との対話を愛し

たと言つた方が適切であろう。彼は樹木、花を愛し、よく山に登り、鉱石を採集し、家庭では園芸を楽しんだ。新島旧邸のいま新島会館のあるあたりは、彼の実験圃場で、ここで当時まことに珍らしかつたトマト、イチゴ、アスパラガスといった西洋野菜を作り、学生にもご馳走し、西洋野菜の普及に貢献している。日本を代表する花である菊を海外に紹介したのも新島であつた。徳富蘇峰が郷里の熊本で青年を教育するため「大江義塾」を創立したとき、新島はニュー・イングランドの代表的樹木であるカタルパの種を贈つて蘇峰を激励している。カタルパの木は現在、熊本市の徳富記念館の庭にあり、新島―徳富の師弟愛を偲ばせてくれる。

明治時代の代表的教育者としてよく引き合いに出されるのは福沢諭吉と新島襄であろう。福沢の創立した慶応義塾の立学の精神は「独立自尊」の人物を養成するにあつた。福沢の有名な言葉を借りるならば、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を

造らず」といった個を尊ぶ精神である。福沢が慶応義塾で重視した学問領域は「経済学」であった。経済とは経国済民を略した言葉である。上野の彰義隊と官軍との戦のとき、福沢は銃砲の炸裂音を聞きながら平然と経済学を講じた話は有名である。片や新島であるが、明治八年同志社英学校が設立されたとき、開講課目の大半が「自然科学」に関するものであったことは注目しに価する。前述のように新島は自然との対話を愛した人であった。自然現象を率直且つ慎重に観察して、その因果関係の解明を追求することに自然科学の原点が存在している。理工学の理とは自然現象の根底にある原理を追求することであり、工とは原理に基づいて物を造ることである。福沢が出来てきた物の運用、富の配分を扱う経済学を重視したのに対し、新島が理工学に注目した点は、二人の性格の違いが現れていて興味深い。更に同志社英学校が創立された明治八年という年に注目する必要がある。幕藩体制が解かれて間もないこの年は、人間の身分の段階として士農工商といったれつきとした順位が人びとの心を支配していた。物を造る仕事は身分の卑しい人がやるものだと相場が決まっていたのである。こんなとき、旧来の固定観念を打開して科学救国の思想を標榜した新島は確に時代の先覚者であった。

同志社ハリス理化学校が生んだ偉大なる研究者且つ教育者でその生涯を同志社に捧げた中瀬古六郎は「新島先生記念集」の中で「新島先生と科学救国」と題する文を執筆しているが、その一部を紹介しよう。

故先生の科学救国の素志がわが同志社人の手を通じて遂行せらるることの余りにも少なきにあらざるやを思うて、感慨と痛恨と転た切実なるを禁ずることが出来ぬ。

中瀬古が悲憤慷慨するように、新島の高い理想を以て始められた同志社に於ける自然科学の領域も、同志社ハリス理化学校の廃校（一八九七年）、同志社病院の廃院（一九〇六年）以来、鳴かず飛ばずの約半世紀が経過した。ところが歴史の流れは後で回顧するとまことに面白い。政府は太平洋戦争遂行にあたり、我が国の自然科学が対戦国米英に比しかなり遅れていることを認めざるを得ず、自然科学興隆政策を遅まきながら取り始めた。例えば、戦争中学徒出陣（昭和十八年以來）といって文科系学生は学業半ばに徴兵されたが、理工系学生は卒業まで徴兵延期の特典が許された。このような状況下、理工系学部を持たない同志社は政府からの圧力、社会的要請もあり、学内でもようやく理工系学部の設立が計画されるに至った。このような機運が実つて、一九四四（昭和十九年）年には電気通信、機械、化学工学の三科から成る同志社工業専門学校が設立された。同志社ハリス理化学校が廃校になって実に四十七年が経過したことになる。戦後は新制大学の設立に伴い、電気、機械、化学系学部を持つ工学部として今日に至っている。

同志社の姉妹校アーモスト大学の歴史を見ると、同大学の科学教育の発展に関して学ぶべき多くの点が存在している。前

述の中瀬古は「新島襄と科学救国」の中でつぎのようなアーモスト大学復興の消息を述べている。且て同大学は財政が窮迫し廃校の案まで出た冬の時代であった。このとき教授会は地質学のヒッチコック博士を総長に推し、一同無俸酬で挺身し校運の挽回を誓い合ったという。やがてヒッチコックの学会に於ける活躍が認められ、博士の名声が高揚と共に校運は隆盛に転じたという。アーモストの市民も「私達の間にはこんな立派な大学があり、こんな優秀な学者がいるのか。今まで知らなかったのは私達の恥辱だ。よし、私達の大学として育てよう。」との気運が高まり、寄付金が続々と集まったという。新島が入学したのは校運が上昇中の時期で、新島が地質学に興味を覚えたのもヒッチコックにより開かれたアーモスト大学地質学の伝統に負うものである。

さて、同志社大学工学部は一九九四年度から田辺へ移転し、知識工学科を増設して世の要請に答えようとしている。このことは同志社全体にとつても、また工学部にとつても大きな転換期であることに間違いない。私たちは田辺で新島が指向した科学救国の線に添って何をなすべきであろうか。エマーソンの言葉に「Hitch your wheels to the star.」<sup>1</sup>「汝の車を星につなげ」という有名な言葉がある。これは世に有名な「Boys be ambitious.」<sup>2</sup>「少年よ大志を抱け」と同意語である。誰か同志社人の中でエーズに対する特効薬を開発する人はいないだろうか。誰か効率のよい太陽電池を作ってエネルギー問題を一気に解決する人はいないだろうか。いやそれ程大きな星でなくとも小さな

星々は沢山ある筈である。天空にきらめく星に私たちの車をつなぎたいものである。同志社ハリス理化学校の生んだ偉大な科学者、加藤与五郎は、晩年輕井沢に創造科学研究所を設立し、後輩の同志社工学部学生に創造の尊さを説き続けた。筆者も何度か彼の聲咳に接したことがある。創造は直感です。直感は清い心から生れるのです。」と加藤独特のイントネーションで語った言葉は今なお筆者の脳裏に焼きついている。私たちは車を星につないで創造をガソリンにして宇宙旅行よろしく雄飛したいものである。

新島は天然の心を解する詩人であり、同時に自然の原理を解く科学者であった。新島によつて播かれた同志社に於ける自然科学の伝統を育ててゆきたいものである。

